

小池洋二郎著述
別々珍書 第壹號

あほだら經

此本の讀ながら獨りでバカボコやらかささるのみならず至極おもろくつてをかしくつて妙痴奇林奇的列珍書でげす

刊行本局 東京淺草區 南元町廿番地 聞天書院

明治十四年十一月二十五日御届

東京淺草南元町廿番地

同區向柳原一丁目十五番地

著作者 士族 小池洋二郎

出版人 平民 鈴木孝太郎

本誌一冊定價五錢 十冊前金四十五錢 二拾冊前金八十五錢
弊院珍誌の儀ハ前金よて御注文下ささず候てハ何方へも
遞送不仕候間五注文ノ節ハ何卒前金よて御遣し奉願候

大坂北久太郎町	總喜店	同新橋ステーション内	芝屋
西京三條寺町通	福井源二郎	同淺草並木町	文開堂
東京神田雉子町	岩々堂	横濱辨天通	守屋正造
同大坂町通	法木徳兵衛	上州高崎田町	文心堂
同日本橋際	伊勢金	函館地蔵町六丁目	修文堂
同室町	秋山屋	下總千葉町	立具社
同神田表神保町	秩山堂	信州松本中町	竹内禎十郎
同藥研堀	報知社支店	仙台國分町	中村清助
同芝	春陽堂		

特52
510

別々珍誌第一號

○阿保陀羅經

妙痴道士 蓮窓和尚著

エー ふうそまながら。勿体ながら道樂寺坊主の蓮窓和尚が。
 申上ます。御經の文句ハ。十萬億土の極樂世界え。氣輕に往生
 して。蓮の花台で。親世体張り立て。お前と一所に。面白く暮して
 快く樂もうと。釋迦の云れた。お能弄戲半分に。衆生濟度の意
 を。少しく含んだ。お手製の干醬の。滅法界に鹽辛くて。素法界
 に。咽喉のかわく。小言の外なる。帝留の。阿保陀羅經。どうか。皆
 さん。聞てもくねへ。今を去ると。ずんど。以前に。北のはて
 なる。亞米利加國より。ベルリの軍艦。浦賀に來つて。交際始め
 ねへか。貿易しねへか。二つに。一つの返答が。聞きていと。尋ひ
 て。入込む。佛蘭西阿蘭陀英吉利諸國の赤髯連中。これも同じ

く嚴敷談判。大筒小筒を。五体相に並べて。今にも打んず。とゑらひ。權幕は。幕府の役人ハ。恐れて閉口して。正事ナシの止事ナシに。條約結んで。長崎下の關の港を開ひて。貿易始め。是が日本。の文明の元祖で。尋ひて起るハ。長州征伐に。京都。娛多草堂。太草紛れに。伏見の戦ひ。師半ばに。幕府の親玉。將軍。慶喜は。錦の御旗の光りに。恐れて。城を明渡して。上野に引籠み。會津の征伐。首尾よく。濟で。越後のずどんハ。さらりと。鎮り。函館の戦争が。らりと。止で。仕舞ひ。是より天下ハ。王政復古となり。諸大名を。廢ちて。府縣を。設けて。關所を。ふん潰して。鎮台を。定たる。町奉行。廢して。裁判所を。設けて。番所を。取崩して。警察署。設けて。寄力番人の。廻り方。廢されて。巡查を。置れて。三尺棒。持して。市中を。廻らせ。泥坊する。奴。追刺する。野郎。小便垂

る。奴。肩肌。ぬぐ。野郎。也。に。引たて。酔倒。の介抱。に。迷子の親渡。し。宿六。喉ア。の悶着。の仲裁。に。車夫と。乘客の喧嘩。の和解。に。すべ。つて。轉んだ。と。まで。氣を。附。踊りて。はねた。ると。まで。目を。留め。學校。設けて。燈台。を。チヨコンと。立て。鉄道を。開いて。郵便。始る。名主。を。廢して。庄屋。を。止させて。區役所。設けて。區戸長。置やら。徴兵。定免て。町人の。息子を。百性の。骨も。二男三男。皆。取立。る。お。拂。函の。殿様。ハ。華族。と。化る。やら。河原。乞食。の。俳優。が。教養。職。平民。が。苗字。を。附る。を。許して。女郎。を。更めて。娼妓。とする。やら。藝者。が。俄に。天寒。病に。取。附。まて。お。座敷。で。倒。まて。臍。の下。へ。雨。を。降。し。鼻。を。なら。す。やら。喉。を。ゴロ。付。せる。如何。した。も。んだい。貴い。金銀。ハ。幽。靈。の。まね。して。何處。へ。か。影。を。隠。ち。唐草。鳳凰。の。奇妙。な。模様。の。べら。札。が。通用。し。出。し。千兩。持。ても。萬兩。促。で。を。目。形。

がなくなつて。重身がなくなつて。邪魔にもならねば。持振ひに。自由
電信掛るやら。銀行が立つやら。新聞雑誌の發行始まり。佐賀
の戦争も。熊本騒ぎも。鹿兒島征討も。居ながら。坐りて。委しく
知らる。そののみならず。數千萬里の。海路を隔てる。佛蘭西
國にて。一發お屁を放したとでも。英吉利の都で。問男したん
でも。新聞紙の。お取次で。忽ちに分る。何でも貫でも。便利で。自在
で。調法なるのが。是が日本の。開化の。始り。分りて云のか。分ら
ねへで。云のか。實に困り切た。頑固な。祖父さん。舊弊婆の。王政
御一新の。余計な。だの。文明開化の。どこを吹く風だ。昔し通
りの。政治にして。置ア何にと斯といふ。不都合なくつて。差支な
いの。に。西洋の。だの。外國の。斯だ。と。耶蘇教。入込せ。切支丹。黙
許して。借た。金返さなけりや。身代限で。濟させ。さいを。隠せば。

賭博にやアならねへ。刃物持なけりや。強盗にやアならねへ。問
夫する。奴ア七兩二分で。事濟む。火附する。野郎の。懲役一年。人を
殺して。も。打首にやアならねい。小便した。野郎の。五錢の。罰金。
口論喧嘩の。廿錢が。相場で。腕股肌脱へ。五十錢位で。濟み。刺繻
する。奴ア。一圓と五十錢。お役所の。差紙病氣と。胡摩か。着
さめても。御目玉。頂戴の。お吃りで。濟むから。今のお。政治の。總
てが。万事。寛大で。緩か。で。難有。て。涙が。出る。様で。ハあれ。ど。何で。を
税だ。貫でも。税だ。そ。ら。出せ。や。出せ。と。無性。矢鱈に。金。斗り。取
立て。下々。押つめて。政府の。富貴。吾等の。未若。い。天保。時代。の。年
貢が。鮮く。つて。運上。が。不足。で。融通。が。い。から。諸色。が。安くて。四
斗。入。一俵。米。壹分。で。買れ。醤油。一升。二百文。で。買。十五文。で。百
束。か。鱈の。相場。で。十六文。に。一杯。が。温飽。蕎麥。の。直段。三文。が。髪

結で六文が湯銭で。七文出せア夜鷹買て。ポンプの掃除され
いにして。十文出せア。切店で。威張て遊んで。豆鉄砲放して。悴
を樂ませ。六文出せア。お巡りの。棒より。まだ太い。館のお菓子
が一本買れて。十文出せア。筋違橋の。目鏡の丸さより。をうち
つと。でつかい牡丹餅が喰れて。是より準じて。總ての價が安く
て。たんど買れて。碧しが氣輕でよかつたをんだが。今の世の中
ハ此時と違つて大名旗本士族は御家人ハ。五扶持を取上ら
れて。商人よなるやら。一錢共出しの會社を立るやら。山師を
始る。相場に手を出さ。古着屋を開くやら。兎を飼ふやら。日な
し高利の貸附所押開き。資本のある人ハ。どうか斯か。相應よ
押張てくらしを。附ることア。附るが。資本をすりなくし。公債
証書の。ない者ア。斯しちやア居られぬ。左様しちやア喰れぬ

い。喰れなけりや。死でしまア。どうしてよいやらと。途方に
ても。途鉄よくれても。よきをア考ひ出さ。仕方よ困りて。ぼて
ふりするやら。八百屋を始る。そつこを擔ぐやら。一日十五錢
の辨當代人。裁判所で聞かじりの。利屈を並べて。義務だの。權
利だの。不調になつたの。原告だの。被告だの。不服で五坐るの。
控訴して。上告して。判決に。破毀だの。和解に。却下に。辨償よ解
訟と。譯も分らぬいで。頓珍漢語の。根よ葉に合ぬい。無法を云
やら。願つて郵便の。配達となるやら。頭さげて。區役所の。油虫
に出るやら。日雇ひ。手間取り。車挽になるやら。地獄の。立番。夜
鷹の。遠見よ。やべいの。聲だすやら。女郎屋の。馬牛。宿屋の。ぼん
引。打て變つて。百性に。穢多に。太夫に。俳優ハ。飄郎。高き。帽子に。紋附羽
織。まちたか。袴よ。ゴム靴さし。付せ。官員めかして。紳士をかし

て。粹な人氣取て通人めかして。威張て歩行だし。丸で今日ハ。妙
痴奇林に奇的列な。手固變な世の中。夫持たア女が。顔の毛。は
やして。鐵醬落して。新造ぶるやら。箱入娘が。巾着に穴あけて。
色氣を覺へて。大事な所破烈さして。赤ん坊でかすやら。豕牛
喰たり。犬猫殺したり。兎の皮ぶつ裂て。冠り物よするやら。
羊の毛引抜て。着物を織るやら。願人坊主。乞食芝居の清玄
みた様よ。髪毛の毛ぶち切り。獨で大事の頭を敲いて。開化の音
がするよ。喜んでおどりだし。佛壇ほり出す。位牌をぶち。扱
て隣燈皿よ立花押入で。どんたく。お佛器よ香籠ハ徒ら坊や
の玩物。太神宮のお札ハ。雨戸のくすくすり板。水天宮のお札
ハ障子の穴ふさぎかけ。荒神のお札を力任せぶつ飛して。耶
蘇の像と交代させ。お寺の妨主ハ玉子を吸たり。肴を喰たり。

花嫁迎へる。大黒搦せる。やまめを、連れて来て、朝から晩まで、
かぢり附て、抱き附て、泣たり、うなりて、存分に慰んで、たらふ
く楽しんで、ろれでも飽たらず、石塔うりだし、墓地を書入と、釣
鐘脊負だし、障子を擔きだす、厨屋を呼込み、お經を賣拂ひ、道
具屋連て来て、木魚を買せる、輪袈裟を、ぶち切て、赤ん坊の、帯
にする、衣こわして、羽織に、仕立なほし、女郎の身受よ、檀家を
だまくらかし、御布施を集めて、サツサとく出掛る塞錢ひつさ
らつて、藝者に、狂ふも、檀家の人の前ハ、心配して、斟酌して、大
人しく、見せかけ、白粉の、匂ひハ、林香で、胡魔かし、大事な情が、
あでさで、惱んで、口中が臭くなりやア、寶丹のんで、隠すも、鼻
かけ目つかの、片輪ど、なつたり、借金、の、催促人、云譯よあまま
ば、芝居の、幽霊の、松よ、どろくどろんど、姿をかくして、見へな

くやつてしまひ、お寺が、からになつて、貸店よなるやら、本堂
の、無盡の定席と、なるやら、此上なしの、乱暴に、飛切の、無法、云
にいわせぬ、不始末だらけに話にならぬい、不品行ばかり、衆
生濟度の、坊主の役だに、今の坊主の、どうして、こうだらうか、
困つた、困つた、困つた、そのだよ、あまの氣の性か、素唐漢の性だか、
沖の、くらいより、佛法が暗いから、世の中が、變手固天で、泥坊
が、殖出して、窮民が、多くなつて、引張に地獄が、どゑらく、湧て
くる、乞喰殖てきて、火附が、多くなる、借た物返さぬいで、無法
を、いふやら、人の物ア我物、我物の、矢張り人の物よ、思へぬい
で、我物の我物、借てきて布て寐る損料蒲團ひつ擔ひて質屋よ、ひ
んまげて、隨徳寺を、きめこみ、店借で、居ながら、大家の物、ひつ
さらつて、床板ひつぱかして、天上板ぶち毀して、道具屋に、質

附て、ひよつとこさの、すつとこさの、よひきた、どつほいしよ
と出奔するやら、往來あるく人の前から、附當りて、跡の方よ、
ふんのめして、紙入ふんだくつて、赤目出して逃るやら、鷲の
祭りの歸り道に、どうの半買ている、そのすきねらつて、うしろの方
に、しやあがみ附て、兩足ちやか附せて、駈下駄ちよろまかし、
握り尻喚して、舌出して、駈だすやら、犬猫も食ぬい虎刺拉病
が、流行して、あつちでも、げぶく、こつちでも、うんく、青く、なつ
て、蒸すやら、うなつて吐くやら、轉んで倒れて、戸板に乗られ、
擁で送られて、病院に入られて、胃肝を取れて、血汁を絞らる、是
でも、今の人の文明に、進んだとか、開化に趣いたと、か悦びく
さつて、誇つて居れども、吾等に、いせりや、天保時代の方代、
よつ程よかつて、こんなとア、なかつたど、政府のお慈悲の難

有^かみ^が、知^しれ^んの^か知^りつ、い^ふの^か分^から^ねい^で、い^ふの^か分^かつ^て、い^ふの^か、箆^はにも^も棒^{ぼう}にも^も、旗^から^ねい[、]小^こ言^ごを[、]べ^ちや^かち^や、並^なべ^たて[、]昔^{むかし}を^羨み[、]大^{やま}和^わ魂^{たま}な^ぜ、顔^{かほ}つ^んだ^さア^ねい[、]西^{さい}郷^{きやう}隆^{たか}盛^{もり}な^ぜ星^{せい}に^化た^と、馬^ば鹿^か氣^けき^つた^る、寐^ね言^ごを[、]う^なり^だし[、]利^り口^{くち}な^風として[、]も^のし^つた^振ち^て、發^{はつ}明^{めい}ら^しく[、]見^みせ^るも[、]頑^{がん}固^こと[、]舊^{きゆう}弊^{へい}の[、]け^んち^ん年^{ねん}寄^きア^話し^にな^らね^い、相^あ手^てに^や、さ^れね^い、や^まく[、]困^{こま}つ^た、頑^{がん}固^こと[、]舊^{きゆう}弊^{へい}の[、]年^{ねん}寄^きに^や困^{こま}つ^た、こ^んな^者等^らを^けな^して[、]く^さし^て、お^びや^らか^して[、]す^つび^やら^かし^て、嘲^{あざわ}り^笑ふ[、]今^{いま}日^ひの^人心^{こころ}で[、]文^{ぶん}明^{めい}開^{かい}化^かの^世界^{かい}に^名を^賣て^人々^に信^{しん}じ^らま^てて^天下^{てんか}を^自由^{じゆう}に^し、德^{とく}望^{ぼう}つ^なぎ^込で[、]板^{いた}垣^{がき}さ^んの^様に[、]あ^つち^でも[、]板^{いた}垣^{がき}さ^ん、お^い出^いを^待受^{まちうけ}升^{あが}り^を願^{ねが}ひ^ます^と、云^いふ[、]様^{やう}に[、]な^れず^ば、參^{さん}議^ぎに^なり^たい[、]大^{だい}臣^{しん}廻^{まわ}

に^なり^たい[、]權^{けん}妻^{さい}を^持た^い、煉^{れん}瓦^わの^家に^住居^{すま}い^{たい}、旨^{うま}い^物食^くた^い、芝^{しば}居^いの^立見^{たちみ}、し^たく^ない[、]べ^んべ^ら着^きて[、]い^たい[、]辻^{つぎ}車^{くるま}に^のり[、]た^くな^い、義^ぎ太^た夫^{ふう}き[、]た^い、講^{こう}釋^{じやく}も^さ、た^へ、都^と々[、]一^{いつ}習^{じやく}い^たい[、]藤^{とう}八^{はち}拳^{けん}覺^{かく}へ^たい[、]三^{さん}味^み線^{せん}の[、]ひ^ける^から[、]月^{げつ}琴^{きん}習^{じやく}い^たい[、]消^{しょう}本^{ほん}ア[、]知^しり^てい^るか^ら、覺^{かく}へ^たい[、]こ^れと^いふ^ても[、]お^金が[、]さ^さに^たつ[、]金^{かね}が^なく^つち^ア氣^き儘^{まま}に^なら^ねい[、]金^{かね}に^なる^とア[、]何^{なん}でも[、]や^らか^せ、備^ひる^とな^ら、す^かさ^ず掛^かつ^て見^みろ[、]地^ち球^{きゅう}の[、]ぴ^つく^りか^へる[、]錦^{にしき}繪^えも[、]遅^{おそ}け^りや[、]信^{のぶ}山^{やま}家^か傳^{でん}の[、]千^{せん}金^{きん}丹^{たん}の^まね^して[、]賣^うり^に、鹽^{しほ}辛^{から}聲^{こゑ}、た^つ丈^{たけ}出^だして[、]品^{しな}川^{がわ}の^はて^から[、]千^{せん}住^{じゆ}の^果迄^{まで}、ど^なつ^て、あ^るか^して^も、疾^{しやく}に^いけ^ねい[、]何^{なん}でも[、]是^{これ}か^らし^こ玉^{たま}、儲^{たくわ}ける^に、人^{ひと}氣^きの^付ね^い、意^い表^{ひょう}に^出た^る、で^つか^いと[、]や^らか^すよ^り、手^て段^{だん}の^ある^ゆへ[、]そ^まと^も、樂^{らく}し^て威^い張^はて[、]く^らす^に、お^鼠ひ

きはやして、人物らしく、見せかけ、あべつか、つかつて、お世辭を
 ぶりかけ、日曜の朝に、五機姉伺ひ土曜の夕方に、棋
 棋のお相手、三度に一度、肴のお使ひもの、十日に一度、寒
 玉子の、お見舞ひ、閣下のお尻へ、麝香も及ばぬ、殿下の、お筆へ、
 書法が正くて、唐人風だのと、生誕八百おへ、で、胡腕かしべ
 ん茶羅で、いひくるめて、猫撫聲で、丸めて、何でも、尻々、貫でも
 蠅々、心の電信、情合のユレキが、感じて、引掛つて、旨く通ずま
 ば、お召状、到來して、忽ち十等属、月給に、あり附て、洋服きはじ
 める、高帽子冠り出す、權式ぶりく、あるきだす、實に官員バ、鳥
 渡見がよけまど、時々の地震に、心配たへず、に、精神錯乱、賭玉
 縮まりて、罫丸つりあかつて、上りたり、下つたり、年まだ若く
 つて、小田原提灯、人への笑へる國會を、開け、民權やら張ま

民權はらなけりや、世がたちゆぬ、國會開かなけりや、下々
 つまる、北海道の官有物、拂ひ下る、不當だ、誰そまへ、太
 奴で、五代の狡猾が、權利だ中止だ、議論だの、すべつたのと、蝶
 々、哩々、新聞で、た、くやら、演説會で、どなるやら、政府の俄に
 見合せするやら、取消しするやら、國會開設の、年期を、さだめ
 らる、大隈參議が、辭職を、してから、百圓に、二百圓、三百五十圓
 四百圓に、五百圓の、でつかい古鯨が、お拂函、くうやら自身よ
 りひくやら、月給棒に、ふりて、涙をこぼすやら、馬車きた、き賢
 て、手ぶらで、あるくやら、水戸に、田地を買て、百性する氣が、家
 を安く譲りて、權妻をた、きだして、故山に、歸りだし、足を棒
 にして、錢とり口、探すやら、口腕一つで、新聞屋に、もぐりこみ
 たのんで、銀行の役員となるやら、今春柳橋の、天寒狐の、氣を

もみ、桂庵の妾の周旅料が、いつ違ひ福澤の諭さん謹慎始る
 舟宿の岩チャアン、疑惑を、受るやら、中で旨いのバ、某新聞二
 万圓の、保護料で、五百圓の月給で、福々長者ハ、お尻々を、使て得
 意額は、じめて金持の振して、色男氣どりて、甘茶で、かつぼれ
 茶ハ、辛くて咽喉が、わわくと、鼻の下、鉄道にして、藝者買て遊
 ぶやら、外の新聞屋ハ、發行を、どめられて罰金禁獄の、お灸を
 すざられ、願柳散人ハ、國事ハ奔走する戸田の欽堂さんハ、慷慨
 ほふりだす、醉多道士ハ、小西の甚チャアンハ、浮世を馬鹿にして
 政治を、茶かすやら、荒川の、高さん、又舌拔をるやら、静岡の警
 署で、御調べ最中、万亭の、應賀さんハ、望遠鏡かけずじ、どう
 して、見抜たやら、皆なの、知らねへ、未來のと、雷て、近い中に賣
 出す、秋月の種さんハ、日向に引籠み、可愛小万さんハ、鐵齒を

として、島田嶽に結直して今晚ありんど、想鳴りて、笑つて愛
 敬こぼして、三味線枕にする、今の世界ハ、開けた性だか、進ん
 だ、性だか、お金を取るのを、氣輕に思つて、財布が、からになる
 も、贅澤きハめて、米櫃からになるも、奢に耽るやら、文明開化
 ハ、穩か、氣樂で結構な世の中いひたい、お話しハ、しこ玉あ
 れども、又のどげんど、此所で筆を、とめ仁阿無阿彌陀佛の千秋
 樂、となりて、目出度お仕舞に致しませう、バカボコく、へエ、
 左様なら、大きに親筆集

院告新書
 ○養龜頭 碩鴻金語玉言鈔 田島任天序 全一冊 定價廿五錢 遞送稅六錢
 ○西 諺 一名美人か、み 小池洋二著述 全一冊 定價廿九錢 遞送稅四錢
 ○售媚艶評 小池洋二著述 全一冊 定價廿九錢 遞送稅四錢
 この書ハ、東京全都のあるとあらゆる別品の内幕を摘發したる風才流子必讀の珍
 書なり、右何れも前金にて五注文あらば直に遞送仕るべく候郵便爲替にて金員
 お遣しの節ハ、淺草橋郵便局へお振宛奉願候

服部應賀著述

近日發兌

○明治十五年未來記

全一冊 かな附書入

此書ハ服部先生が豪放洒落なる資性と老練自在なる健筆とを以て來年日本國ハ如何なる有様になりゆくや十五年の日本人心ハ如何なる氣象をあらはすか今年今日にありて悉皆見抜て著作せらまたる珍本なれば諸彦購求あらんとを

小池洋二郎撰

○官省院使廳府縣事務職員概要

全

右ハ諸官廳の主管せらるゝ事務職制ハ勿論附屬の寮局部所の主務より長次官様方の位勳姓名月々お貰ひなさるお給料の高まで委く記したる至極便利で調法な表ゆへ不日發兌の上ハ五購覽奉願候也

發兌書林

淺草小嶋町六十九番地

川上主人白

160
703

○題詩

別々珍書別々珍番々、新作番々新。遊窓和尚濟生筆。
隨喜歸依發兌辰 神田 詞林仙史
柔雲拜承珍誌、件態々通知難有存。乍去何出何体裁。
不觀先祝買人繁。 郷臺 詩畑耕人

明治十四年十二月十日刊行

發兌本局

東京淺草區南元町廿番地

聞天書院

小池洋二郎 著
別々珍誌 第二號 定時刊行

人間萬事慾の世の中

〇投書家諸君に白す
 弊院珍誌の儀ハ毎月一二回必ず屹度相違なく發兌可仕
 候間その都度五購讀下さるゝの勿論四角八面の政治論で
 も石部の金さんが涎れを流しさうな艶譚りでもお臍が茶
 を湧しさうな狂詩でも食つたもの吹出す様な狂文でも其
 他百々一であれ謎句であれ狂歌であれ俳借であれ何であ
 れ蚊であれ搦はず遠慮なく無性暗雲に投書被成下度且五
 投書の新聞原稿の四字状袋の上に朱にて認めお差出し
 あらゆる官府の慈仁なる無税にて届きますから其お積りで
 〇本誌校合往々疎漏に涉り誤字落字かな違ひ等をひん出
 來しお看客様方へ對し甚だ以て實以て相濟まざる次第に
 付校合方の若し嚴敷目玉を食はせ置ましたれば以來ハ
 氣が附れるでありませうハア

別々珍誌第二號

人間萬事慾の世の中

夕霧丹治稿

生馬糞掴へて眼の栗玉を引抜き生牛打斃して兩方の角を
 負抜き人の胸倉ふん捕まへて後ろの方に突飛し人の向臍
 ぶつ掛つて前の方へ糞返し知らぬい風をなし見ない振を
 なし氣の附ざる体をし何も食はぬい様をしいゝ氣味と笑
 ざま見ろと嘲り問拔と誚り馬鹿と罵り外聞を憚らず体面
 を擽はず人情を斟酌せず義理に頓着せず仁義は北風でど
 こへか吹飛され道德の驟雨でどこへかぶち消いヌッ
 敷太々敷原餘數弱い奴の無性矢鱈にいじめて困らせ責め
 つけて苦しませ強い人への暗雲無暗にお別佳つかつて崇
 め奉りお世辭ぶちまけて拜し尋び何でも吾さいよけれや

人の堂でもいゝ人はどんなに苦くても吾さい困らなければ
やいゝとい今日の世の有様夜る入口の戸締りをもせず白
川畫船で寝て居るも泥的の這入るゝとなく金釵銀烟草往
來のまん中に落ちてあるを見るも誰も拾ふ者なかりし
堯舜の世の有様疏食を飯い水を飲み臂を曲げて之を枕と
す樂み亦た其中に在りといはずとんと昔しある聖人のいゝ
し鬼言にして黄表紙の附きたる書籍に存し後世傳ひ來り
て名言だとか金言だとか鐘棒に之を稱讚し素敵に之を感
服する者もありまするが私しの考ひに此の如き寐言を
迂鳴りだす人の本氣にわらず又これを間に受て聞く者も
正氣にあらざるかと有ト舛何となれば此聖人の堯舜の世
の如き慾氣のない人ばかり寄集りたる時に生れたれば

こそ斯るともいゝしなるへけれど若し此聖人をして明
治今日變手固天頓珍漢なる文明開化の世にあらしめなば
決して斯る妙痴奇林なといはずして却て慾氣のぬい者
ハ人間の部でないとか旨くぬいもの喰つてまづいものを
飲み苦ししい思ひをして困つて居る者の慾氣がぬい問拔の
飛切り馬鹿の最上だとか何とか蚊とかいつて嘲り笑ふや
違いぬいのまん中理屈の當然なり方便品に曰く三界無安
猶火宅の如しと寔に實に鳥賊も章魚にも五無理五尤至
極千万仰せの通りその通りそれに違ひ五座いませんお
互様五同前様におぎやアと此世に生れ出てより呼吸ない
と眼を丸くし足を延して迷土へ遊びに行くまでの間は是
でいゝ先づ安心だといふとはなく臍の糞程も氣に休みは

なく爪の垢程も心に弛みとて、なく恰も火の中に住居して火の中に擦起を志てゐる様なものにて其原由を尋ねるに食たい飲たい着たい何したいといふ四慾に過ぎず左れば人間の一生涯僅か五十年のこの四慾のためにこの困苦をなす困苦する故に四慾も得られ一日にいゝば困苦で此後後へ生れ来て困苦で迷士へ往き終る様なものにて自分乍らも考ひれば考ひる程思ひ出せば思ひ出す程實に馬鹿らしく寔に阿房らしく何も手に附す何もする氣にいなられませんがさうかと申して慾もなくつて此世に生存らいて居るといふ出来ません私も此慾が深くて隅田川の何のものかハ大江川そつちのけともいふべきほど澤山どつさりしと臣充分仰山に滅法景に五座いまして是を以て去

四

月より別々珍誌と肩書を附け定時刊行の新作物出版の儀官府へ御届仕り既にあほだら程の部及本馬鹿五喝菜に預かりいふく五愛看を蒙むり睡くまにいて三万三千三百三十三冊の多き賣高に相成り爲に洛陽の紙價をして紙に騰らしむるに至り私しが臺所の大に危うく米櫃のがた附想多附場合を五救助成下されお陰様にて私しも何の變りもなく少しの障りもなく咽喉をかのかさず別殿にの見限ふれず無事安逸壯健達者大豆で小豆で今以て浮れて暮し暮なく凌ぎ居り候段皆是諸君のお情の深きとお恵の厚きとによるものと夜も晝も頭をさげ手を合せ伏し拜み誠に以て實に早あり願き仕合に奉存候つきまゝにて

私しと此お禮ハ何を以て充てたらよからうかと存じ候へ
共何分今が今と申す譯にハ至らず候間何れ此世に生存ら
いて居るうちにハ慥に正に必ず屹度是非滞りなく相違な
くお情に報いお恵に酬ゆる存寄り心得所存量見にこれあ
るども之なくとも先々これありと致し置候間諸君も何卒
左様お思召し其お積りで宛にしてお待下さるども宛にせ
ずおいで下さるゝとも其ハ諸君のお腹にあると何も私一
より彼是兎角と申すべき所に無之候借早私しハ斯まで諸
君より深きお情を蒙り斯まで諸君より厚きお恵に預り一
時財政困難と申してハ大要なれども生活上必迫の場合
ハ堂やら辛や少押通しいんやらやつと暮し來り候へ共そ
の後引續き米薪炭油等日用必須なる品物の直段ハ皆高く

なり外て淺草の五重の塔ハ何のものかハ駿河の富士山も
そつちのけといふ折柄又々生活上必迫にあらんとする場
合に立至りお負けに鼻つ先きに大晦日といふ苦しい切な
い峠を扣い居り候に付寐ても醒ても片時忘れぬ主のと
といふ様な洒落どころろてハなく只何となく氣が塞ぎ心ガ
籠り飯を食ても六玉咽喉に通はず別嬪を見ても善悪の差
別之分らす盆鎗然毛路林乎として日々心配のみ致し居候
一體全体この大晦日と申すものハ其年中の事を取片付け
て新年を迎ふる仕度を致すもの故勘定の繰り取引の極
り方懸集めに人々出し借金取りに人を踏込ませ煉帯をな
し餅搗をなし歳暮の禮式其外難だ艱だと種々雑多の事に
て誠忙がしくせハなく痛く痒く左ればこそ百々に

も箱根八里の馬でも越すが越すに越されぬ大晦日と申し
まして人間在世一年の中の一苦労しい切ない節季であり
まする是を以て私志の存じまするに本誌を五愛覽下さる
看客様の皆お情の厚き御方のみ諸君の悉くお恵の深きお
人柄斗りなれば和尙の今日の辛苦を告げ窮乏を陳べてお
繼り申しおねだり申し五無心を致し五難題を願ひました
ならば眞坂四方や之を御取上げ下さらぬといふとある
間敷と存じまするか何を申すに只お池り申し唯五無
心を致すといふ余り厚益敷酒就張た所爲なれば鳥賊に
も章魚にも諸君へ對し甚だ以て相濟まざる次第也況んや
人間萬事慾の世の中に此の如きと申すも今日の新紙弊
の如く通用せざるに於てをや故に此大晦日の用鎖をなし

生活の豊饒を圖らんと欲せば又々例の太平樂を想ひ相
變ふずの山放題を搔率てお定りの通り一冊に付金五錢宛
の代價を諸君より遠慮なく會釋もなく頂戴仕るに如はな
しと存じ底で以て蓋で以て何が面黒く可笑き新作物の種
子にあるまへかど首を捻り手を束ね十方百計ありもせざ
るかい智慧袋より無理無体無性矢鱈にいんやら奴床素床
さのさつさと考ひ出し案じ附て此本を著作し又々面の皮
厚くも諸君へ綴り付きねだれ込み以てお助けを乞ひお救
ひを願ふ次第にて且私しお毎月定時刊行の新作物も最早
此度を以て目出度千秋樂に打上げ誠に早當年中の五愛
に預りまして難有存じ外猶明年も相變らず五愛覽を願ひ
ふしといふ叙切非のお宛り文句判押形のお定りの口上を

以て諸君にお暇乞を仕る場合に至りされば堂でも幸でも
否でも應でも是非一冊宛は買て項戴など妙に柳橋の藝者
天寒のまねして乙に白粉の匂を嗅せ變に猫洒落を爲ざる
を得ざるの即ち私しが人間萬事慾の世の中に引れて來る
節造物主より賜りたる慾心の然らしむる所にして諸君も
亦たそれを一冊宛お買下さるの人間萬事慾の世の中にお
生れなさつと御身の因果前世の約束慾で持つ世界の義理
慾の世の中のお附合實に是止むとを得ざるの次第なり杯
とことつけもトつけ我儘氣隨勝手放題などを申したな
諸君の中に五心配の余りヤイチャイ聞天院此曜坊主め手
前のよくもそんなよあやべりが出来るなア本とに冥理
の程が思ひやらるゝ哩など、おつあやつてお案じ下さる

も計られねど私しにをきましての五案じに預るまでもな
く自分乍とも何の因果で斯うおしやべりができるのかと
思ひますれば呆れ蛙の願破りどころでなく愛相も古僧
も盡きて仕舞ひ中し候畢竟これと云も腹に慾心のある故
におしやべりもする様なものなれば諸君も其邊の深く偏
に万々呉々も五推察下され度候斯く申上候へ私しか此
本を澤山諸君に押賣致す即ち鹽辛口上の様に當り候へ共
私しの本心の決して箇様な利己主義の慾張り筋我利々々
亡者の抱込み一件にあらざるなり唯私しの爲めを願へ只
諸君の爲めを圖らんとするの切なるより斯くの申す譯に
て其諸君のお爲めを圖るといふの乃ち諸君をして利口に
したる才子にしたい通人にしたい生氣にしたい粹な人に

したたい慾ハ人間一生涯の寶といふことを知らせたいといふ
 よ外ならず然りと雖も世の感トのない取りどころのない學
 問のない智惠のない木偶坊の様なる人達の輕蔑しくさし
 て斯な馬鹿氣た氣狂染た本が何で人の爲めよなるものか
 堂して人に益するものかといひる、ならんが云ばいひ勝
 手にぬかつしやかれ私しんこんな籠棒に構はざるなり
 一休私しの新作物ハ當今五自死許の變手固天の妙痴奇
 林なる大先生方の五齋撰あそぼし口〇論だの〇〇軌範
 だの日用便覽だとか経世論編だとか題表ハ五大層に立派
 に聞ゆれども其實古い書物にあるとを焼直したり新し
 書籍にあるとを抜書きしたり刑法治罪法の講釋憲兵規則
 の丸取りなどの泥坊編輯甘酒著述と違ひ當世究ちの新趣

工一身一院の新發明なれば私しより外に他人の決して爲
 し得べくまぬし得べきものにあらざるハ猶かの詞林仙史
 のお能弄戲三齋の自惚湯鳴豊吉猫の笑顔柳橋阿重猫の
 お座敷でどんたく成田屋の辨慶助高屋の荊茅に於るが如
 し而して此本全篇丸で惡洒落たと惡飄戲たとのみを主
 として牽掻たる所以のものハ讀者をして面黒からせ可笑
 からせて倦しめず厭しめず熟看せしめて人情を解さしめ
 世故に通せしめんとを要すればなり畢竟其之を要する所
 以のものハ一身の脩め方を知らしめ一家の立て方を悟ら
 しむるの捷徑乃ち慾心のある人の寄集りて居る所の慾の
 世の中にありて飯がくいんで眼の栗玉を丸くせない様
 が持んで大事な愛息が飢れぬ様にせんとするの一大眞法

然るに若し諸君これと茶果しこれを馬鹿よさば決して此
 世に生存らいて居ると能はざるべし遺窓大狂生の手製の
 諺よ曰く人間の一生の慾にて保つと夫生の婆姿に寄留す
 るなり死と冥土へ歸國するあり而して此婆姿といふも
 と夢の如く現の様なものよてお互様よ朝露と同じく瞬
 に似たの生命を斯く夢の如く現の様なる婆姿よ儉む一口
 よ之を云バ私し共五同然様の生命の今日ありて明日なく
 今あるかと思ひば後よればかられざる墓あくあつけなく
 情なきものにあらずや左れば荷くを此婆姿に居る間の喰
 たい飲たい若たい何したいの慾あくんば何の面黒きとか
 之あらん亦た何の快樂か之あらん既よ而黒きとなく已に
 快樂なしとせば何を以てか一日も此世に居るとを得可ん

や夫の金持にありさがる相場に勝ちたがる立派な衣裳を
 着ゑがるも鰻飲食たぐるも伊丹の酒飲さがるもお別佳ふ
 んつがつて鯨の手先きにありたがるもお世辭ぶちこぼし
 て鱈の小分になりたがるも猫よ惚れらゑたがるも狐に持
 てられたがるも別嬪で氣轉のきいた女房を持ちたふるも
 様子はいひ取廻りのいひ權妻を抱いたがるも其原由をた
 せば皆是れ慾にあらざるのなきなり又三條公が太政大
 臣の役をお勤めささるは八百圓の給金のため受附門番等
 外吏の骨折役をむ甘んじて勤める人の六七圓金を取りた
 さ代言人の小理屈をいふも金がほしさ芳原の花魁が備斗
 りの玉代で氣障なお客に大事な所を自由にさせるも今春
 柳橋の遊者が二圓足らずの纏頭で不釋な人にじやれ附く

も俳優のころぶも落語家の、たるのも本家の大阪安土町と
 思鳴りてあるくも一痴愚多痴愚たいまさど我鳴で騒ぐも
 鐘々へつたふ鐘々へ太鼓ダ鳴たらにぎやかだどべちやつ
 きだすも亦皆慾の然らゝむる所にあらざるさかき也然
 らば則ち此慾の世の中にありて慾のなき人の大馬鹿の最
 上が大問抜の飛切か曰く然り五尤其通り違いなしと雖も
 慾に善悪あり程度あり其善悪と程度とを擇び見計ひ加減
 して事を爲さへ決して間違ひのあるべき理なく銚筒ひの
 できる筈のなきものなれども否らずして旨いもの見れば
 無暗に飲たがりいひ名酒があれは無性に飲たくなり縮緬
 の衣裳を見れば着たくなり年頃の別嬪と見れば何したく
 なり共食ふい飲たい着たい何したいの唯慾に惟れ任せ氣
 随我儘をなさば果の貧に迫るか耻を晒すか罰金をふんだ
 くらるゝか懲役に投り込れるか世間の笑草となるか新聞
 の填草となるかを免れざるべしされば慾といふものハ恣
 まゝにせず極むべからざるものにて恐るべく戒むべきも
 此なふずや跡ハ何れお近い内に暗濛用

院告課題

一 狂詩題 新年 醉多道士先生撰
右感作の方へ左の通り褒賞を
呈すべし一等丈人藥物一籠二等
唐黒二箱三等詩箋五十枚四等東
京名妓眞影八枚五等本誌二部
一 歌題 松上霞明目藏人大人判
右名吟の方へ左の通り褒賞を
呈すべし一等百和香一函二等硯
敷一枚三等唐香一箱四等揚技入
二 通り五等
右へ来る一月八日發兌の分へ掲
載候間本月廿二日まで玉稿五
投寄被下度奉願候也

田島象二先生序小池洋二撰
一 西語 鴻碩金語玉言鈔全一冊

ボコやれる本でげす何れも五注
文の節へ前金にてお遣しわらば
速に送致すべし

新規賣捌所

陸中森岡本町	澤田 正助
羽前鶴ヶ岡	小池屋藤二郎
名古屋大曾根坂下	松屋平兵衛
三重縣津東町	淺野東助
千葉市鳩通り	乙亥 舍
長崎酒屋町角	安中與兵衛
伊勢大津丸屋町	澤宗二郎
兵庫宮内西町	村松爲助

定價廿五錢 遞送税六錢
右の演説作文の引用書に是非な
くて叶へぬ一大珍書なり
一 售婦艶評 一名東京美人かゞみ
かな附 全一冊
定價廿九錢 遞送税四錢

右の東京中のあるとあらゆる別
嬪の内幕を一切合齊洩す所なく
落す所なく摘發したるもの故風
流才子醉客通人心讀の一大珍書
なり諸君買て頂戴な
一 あほだろ經 全一冊定價五錢
此書の當世穿ちの新趣工誰にも
讀みやすく分りやすく面白くお
うしくめうちきりんなきてれつ
なへんてこてんのあほらしく馬
鹿らしく誰にでもひとりてバカ

初木萬町通り 菅谷甚平
大阪堂嶋 静雲堂

本誌一冊定價五錢十冊前金四十五錢

明治十四年十一月廿五日出版御届濟

著 者 小池洋次郎

出 版 人 東京淺草南元町
廿番地土族

鈴木孝太郎

全淺草向柳原町一
丁目十五番地平民

發 賣 書 肆 藏々堂

東京神町雉子町
三十二番地

○別々珍誌を讀みて 駿台南畔 遊惰戲野夫
たをそ女を別品とこそはいひこやすみの手振もイユ一別々

○讀阿房多羅經 本御台街 詩畑耕人

郵奴格内投書去何事書簡手早開淺草阿兄お經作如余

石部自然哈

小池洋 別々珍誌第三號發兌本局 東京淺草區聞天書院
二著作 南元町廿番地

定時發行

役者ころばし

此書は初免に世の女が役者を慕ふわけを陳べ次に役者ころばし秘法を説き尋
ひて役者にはまり込で一身をあやまつ次第を述たる珍本なれば世の別嬪三は申
すまでもなく仮令錦煉だらけのおさんどん懸の祭のくまでもよろしくといふ様
な忠多福三でも此本を五覽なされば左關次さんでわれ我當三であれ自由におち
ころばし自在にふんのめすことができ升

所場みふりふほめたきはここぬて

休歎無力又無錢。才子元來安小店。誇氣可嗔。可感。每寄夢擁美人眼。寄遠窓大和尙。九段。三好。寒史。

芳名不斷雖聞居。成得拜顔今日初。以後何分御心安。應須交際如水魚。初會聞天院和尙。神田。超古。齋彌郎。

道の邊に咲しいばらも花は花めでし心は梅も櫻も。○ある二妓に寄せて。静岡。三。か。ん。

野も山もみな一圓のぎん世界げにおもしろし雪の景色は。○雪景。神田。明目。藏人。

保妻やに妻おないとはこれや不恩債。○保妻屋の詞林仙に寄せて。神田。次。郎。吉。

若い男と女の差向と掛け「解」は蓄生の名の一に魚類の一淺草八文字屋東京巡査の二等給と掛け「解」は人の總稱の一向島机友明治廿三年の後の國會開設と掛け「解」は廓でいぬとの一本郷詩畑耕人以上のお解當は來る一月三日まで五投寄被成下度奉願候。

別々珍誌第三號 明治十四年十二月十八日刊行

○役者ころべし 大狂生 夕霧丹治 著

竊に人間萬事慾の世の中と題せる本を發見任り候節最早今年の余日も之なく殊に此年の暮と申すもの何だ蚊だと色々様々なる用向のあるものにて寔に忙がしくせはしなきものなれば先今年のお客様方へお暇乞を仕り來春早々より五機嫌を伺ひ奉るべく旨申し上おしやべり仕り置候處茲又お客様方へせひ年の内にお知らせ申し上置ざるを得さる一大事件あり且私しれ臺所も危く米櫃も我多附出さんとする折柄大晦日も鼻先きにつかいて居ると故中々以て既に發見致だる人間萬事慾の世の中と申す本の賣上高位置にては箱根八里を馬でも越すに越すに越されぬ大

晦日と百々逸にもわる通苦い切ない節季を押通そふとす
るを恰も肩按摩が細谷川此丸木橋を渡り飲だくれ泥酔野
郎が愛宕山の男坂を登り馬鹿間拔に刀物を持たせうつか
り盆鎗に毒薬を預けたると一般誠に實に劍呑なきわどひ
とよて旁以て又々出放題を怒鳴り出鱈目を牽掻いて役者
ころいしと題しお客様のお五愛覽と乞ひ五救助に預らんと
する儀おれば何卒お客様方お私しの内情深くお推察の上
不憫な憐れに可愛相に氣の毒にお思召さば否でも應でも
一冊宛て是非必ずやらぬ度お引取り被下度と斯我儘勝手な
とを申しますればお客様方の中には五立腹の余りアノ聞
天院の腥和尚は我利々々の徹邊だとかシャツクの跳返り
だと面の皮千枚張りだどが腹の臆播木棒だとか云る、か

らんが私しにをきましておびくともすつとも尻の尻ども
思はず氣にも掛ねば心にも留め申さず杯と申したならお
情厚くお惠深きお客様方へ對し鳥賊にも章魚も恐多く
實以て相濟ざる儀も五座候へ共生き馬の眼玉を引抜き活
牛の角をもぎ折り人を獲捕まい附のめし跳飛しとりこく
つて己をのみ惟利し惟益せんと欲する意も早出なる意
業羽の今日上は辰棒も貴く素敵も五立派なる紳士より下
を裏店九尺二間も住居する大工の三太郎桶屋の熊吉も至
るまで一体總別も押並して輕薄無情お通義するの世の中
なれば私お斯今忍れ口を叩き勝手氣儀を怒鳴りて此本を
一冊宛てお引取り願ふも寔に是止むを得ず據るなく余儀
なく致し方なく是非もなき次第なりといふべし何と皆ぞ

んさうで有摩の鬼子母神など、悪酒禮之先こゝらで千秋
樂と致しまして彌々役者ころばしの段を五覽に入れます
其爲口上左様凡そ世の女が芝居に現を抜し役者を戀ひ慕
ふの恰も男子が娼妓を買つて悶を遣り藝妓を揚げて現を
散じ愉快をなすど一般實に是れ止むを得ずよん所なき
次第にして且夫女は男子の如く誰の前をも憚るとなく案
ずるとなく娼妓を買い藝者を揚げ勝手次第な愉快をやら
かすといふ譯に之に至らず親の前を遠慮し夫の前を心配し
兄の前を斟酌し妹の前を氣使い加るに家事も追れ生計を
治むる責任を有する者と云たら大褻褻にして五大層なれ
共先女と男の三分の一も愉快とは出来ぬものにて後世
婦人の身と生るゝ勿れ百年の苦樂他人に委ぬとは昔し古

人の云れし金言これが何よと論より証據實に女の一生と
いふは情なく慕なき次第ならずやとせいふもの、これが
女天性固有の美質にして何でも女之貞實にして操節をた
ゞしあせずんばあらず然に若己の情慾を逞ふして男な
誰にでも振舞い人なふば誰にでも五馳走するが如きとわ
らば音に美德を失ふのみならず天理に背くこれより大なる
ものなからんとす何と我むへく謹むべきとならずや左
れど世に活とせしける者何をか色を好まざらん男は女を
愛し女は男を慕ふを横より論ずるも縦よるも云するも理屈
の當然當り前のまん中にして又其男の中にも役者ほど愛
敬のある者はなく芝居ほど面白きものもあるまじされバ
五
五
官員様の五新造さんやおく様や馬華族殿のお姫様やお

六
妾さん町家のお神様五新造さんお嬢さん娘子さん裏店の
山の神お寺の大黒その外吹左衛門浮氣後家おきやん阿魔お
てんば娘総格家の板負乏長屋の漆板に顔する跳つ返して
女に至るまで羽織に役者の定紋を附たて指輪に役者の名
前を彫したて役者の寫眞を守り袋ま入れ給錦の肖像を着
物の襟に入れ役者の鼻つ紙を車輪お護符の代りに飲み喜
知六の藝がよいけれども素顔で見ると丁度密柑の皮を指
で押潰して散蓮華の様だとか高助を何も外に云分なした
か顔があんま丸すきるの宗十郎の顔は陰分柔和で色白
なれども少一眼尻が下りて口があんまを曲すぎてゆる
とか鶴森の齒莖へ剃出てるて眼の色が赤すぎるの關三の
鼻は曲りてゐけかいの我常へ趣隨の見目よしの氣量よし

七
にて鼻の高き所眼つきの様子口もどの所などへ能開天院
の蓮窓さんに似てゐるの菊五郎と無類の人柄にて色白で
ものいひの様子と巫山仙史丸だしたとか時藏の痘痕と誠
に愛敬のある人柄な丁度前橋の烟峯さん直寫したの福助
の顔付は額といひ鼻形といひ眉毛の厚い所や口元のちい
सान所などは能静岡の三柳舍齋吻さんの様だとか壽三郎
は藝といひ口跡といひ何も云分あしたが背の低い所と顔
付のやさしい所は詩畑耕人さんそつくりだの團十郎芝翫
は無類飛切の名代役者丈ありて何をさしても實にいひと
かそれ役者やれ芝居何でも狂言だ漢でも役者だ役者であ
くつてと夜が明ない寐ても役者だ起ても役者だ役者と一
所に暮すならみ山の奥の詫住居細谷川の布晒し芝蒔る手

業糸車縫針仕事いとやせぬなど、一神浮乱よ氣違いめか
して先やさほどにも思ひやせぬのにつちや登りつめど
業唄の文句にある通里役者々々と無性矢鱈に戀慕われ思
ひを掛らるゝも五尤至極私しの様な男ですら悴がなけれ
や一日でもいゝから役者の女房にならなりてみたいとぞ
んじますれば況てや御婦人方にをきまゝては誠に實よ斯
とあるべき筈かりといふべし然れども役者といふものと
輕薄の徹邊無情の跳つ返りすれつ括しの最上者やん骨の
飛切也へ並一通り十人並位か顔付容体の女が之に思われ
様の慕はれ様のとするは恰も貧乏人が三井銀行を厭倒せ
んとを欲し深川邊の材木屋の息子等が町田今亮さんの淺
草區長になられを羨み不粹な野郎が詞林仙史の通人な

るを羨みへつぼこ書生へし民權家が板垣さんをそつちの
けにあらんとを望み中世の世より格好のつゝと
耳で早う人の膝さす本の世より格好のつゝと
と如よの用立筋な大先生方が本誌のかき堀梅をまねんと
を欲し米の安くあるを望み馬鹿が利口にならんとを願ふ
と一般實に是決して出来ぬ相談なりとはすすものゝ縁
と異あもの乙あものたて喰ふ虫もすきく遠くて近きは
男女の間も一合縁奇縁は妙なものにてお多福さんと業平さん
との間も一朝意機相投すまば比翼連枝の女夫つれお前百
までわしや九十九まで共に白髪のはゆるまでと唄にもあ
れば強ち別嬪ハ美男子と添連ふべき者芳町の奴猫は必ら
ず時藏に限り有明樓のお菊さんは屹と高助に限ると云譯

十
にわらず播木に摺鉢われ鍋に綴ち蓋火事坊に啣筒雨に傘
年寄にあんか猫にまたたび餘に地震杭友處士が膝吉と抱
寝する三鑑齋が猫の寫眞に喰い付馬は馬どりし牛は牛連
れ古人の所謂同聲相應と同氣相求め水は沸に流れ火は燥
に就く雲は龍に従ひ風は虎に従ふ則ち各其類に従ふ也さ
れば女の方で役者を思ひは役者の方でも其女を慕い此方
が戀しがれば彼方よりもなつかしがるへき筈なまごも此
の如き難有い仕合な女は淫遺奴戸百人に一人千人に一人
あるかない位にて若方が一あるのは其日の様子其時のは
つみまつないのが何より確か業体上より論ずるも斯と極
るべき所なりと云時は役者といふ者は誠に不人情で頼母
敷ない様だが庭々乃ち秘傳の施一所策略の用ひ所手管一

つで否應あしにうんと云することの容易できるものにて
其秘傳といひ其策略といぬは先平日戀ひ慕たふ所の役
者の這入た座へ見物に往き茶屋に掛つて幕の間たよ鳥渡
其役者の部屋へ往き初めての對面一通り此挨拶を済し厭
らしき目付をせず乙お素振をなさず優よ見せかけやさ
く見とせ唯何となく一心よ戀れ慕つて居る實意を役者
の方よ悟らしむる風情ありたし而して餘計なとを云ずお
しやべりをせずとは云ものゝ余を黙まりて居るも啞か何
ぞの様で可笑なとの故あつさりとしさいやみなしの浮世
話し此二つ三つ位で茶代此三圓程も紙に包んで置て其日
の直茶屋へ戻り神さんや女中に對しても奈何にも部屋よ
り早く歸りしを残り惜さうよ見せ余りおまやへりをせず

唯煙草でも吸ながら其役者のういさ計り二つ三つ話して
 音羽屋さんは流石當時賣出しの役者丈あつて人柄でやさ
 しくつて頼母しい人ですぬ位の所にて止め神さんに先二
 圓位包んで遣り女中へは五十錢位宛包んで呉れ幕の明
 頃を見計りて座内へ往き仕舞迄見物して又茶屋へ戻り酒
 肴を出させ神さんと呼んで一盃飲しめ今日の狂言の端に
 面白ふ五ざんしゝ寶に此座の役者さんは揃ひも揃つて皆
 藝のようござんすよ中にも音羽屋さんの藝といひ口跡と
 いひ年若に似合ぬ腕前ちやあまませんか杯ど乙よ自分
 の氣のある思つてゐるを先に悟らせる縁に話しかけ又
 一圓程紙よ包んで神さんへ遣り尋て其日の拂ひを済し底
 々にして家に歸り十日も日數のさつた頃に又往いて矢

張せんの茶屋へ掛り見物するがよろしく且幕合にあつた
 ら茶屋へ戻り女中か若者を案内に立せて例の役者の部屋
 は顔出をなし今度の狂言は誠に面白とござんすから又見
 に参りました位の話しにて止め惜氣なく散射構はずに此
 日の五圓位の茶代を置いて茶屋へ戻り相も變らず神さんや
 女中に對して役者のとに付て物案ト屈度してゐる様子に
 見せ二圓程包んでこつそり神さんへ與ひ相角する中幕の
 明ころを計り再び座内へ往き跳まで見て茶屋へ戻り無性
 に其役者のとをいふべし而して酒肴を出させ神さんと呼
 んで例の如く一盃のまゝめ狂言のはちり役者のういさ杯
 をすへし斯すれば神さんの方でも其ど悟り音羽屋さんを
 鳥渡呼ばせませうかといふや必定その時にへい堂でも宜

敷の頼もふし升と平縛れても彼方を渡世柄だけ客を空さ
 ぬ様に機嫌をとるのが本職故忽ち先へ呼びにやるべし須
 臾して音羽屋來らば先一つ盃をさし何か臨機の話しをし
 て尋て役者に三圓程包んで遣り附添へ一圓位包んで與ひ
 又神さんへ二圓程も包んで遣れば底が即ち電信のか、り
 初め越氣の通じ始め萬事萬端神さんか程よく都合よく取
 持ち取計つて丁度よさ相な所で其場をはづす後は二人の
 さ一向ひつひ轉び寝の手枕に雲雨巫山の快よき夢を見る
 を得るに至るは証券印紙を貼ても受合ふ所よしして向ても
 役者よりほれられんと望み役者をとろばさんと欲せハ
 第一に金第二に策略第三に身姿この三つのもの備らず有
 るなくんば決して望み通り思ふ様よなるべき筈はあく中

いも身姿の誠に肝甚なるものにて先年増ちらば番と柳橋
 形に純金四翫つなぎの根掛黒の鹿の子絞りの手柄水色鼈
 甲の櫛に純金毛彫の中差粉柱と淡泊として余り白めかさ
 ぬ方が宜しく着物の茶万糸織の共重ね帯は黒唐縞子がよ
 ろしく縹緋の襟の黒濱縮緬へ濶燕鳥の縫取り藍葡萄の袖
 口などと實よ人柄で高等で生氣でもなく野暮でもなく頼
 母敷大人敷て宜しく又新造ならば鬚は山吹島田に金糸の
 元結袴之余り目立ぬのを用以姫一樂鳳地の紺編下着へ古
 渡り藍の堅編唐棧の上着を重ね帯は矢張黒の唐縞子がよ
 ろしく帯留は栗梅さなだに白狂の破鎮附羽織之年増新造
 に限らず余り人目に立ぬ色合の編柄を用ひ紐ハ深風か薄
 茶の細糸織を掛け下駄の柱めの洗出しに櫻皮菱編の表ダ

密の莞菴附にて二前齒の齋敵に高くもなく篋棒に卑く
もなき代物へ紺天か黒天の鼻緒を用ひ桐の洗出し中れ折
下駄の履べからず何となれば生意氣か跳つ返りの様に見
へて宜からされバ也又紙入へ天歎羅か銀流しの鎖り杯を
附け帯合方びか附せるの宜かはず何とあれば御登り限り
なく氣障ア云べおらざれば也その他齒の裏表をよく磨い
て口中を潔いにして手拭の汚れたるを用ひず手足の爪を
よく取り何に附け蚊に附け物事よく行渡り抜目なく如才
なく氣暢よく取廻りさば十八並の女は勿論たどへ足より
内よ引込み七人並位の女と雖も役者より思われ可愛ら
れ愛され惚らるゝと髓に正に確と屹度私しのお請合す
す所ろなり然るよ世の飛上りのおきやん阿魔や跳つ返り

のお天婆娘や大通りよめる巡査の函番の様よ出過ぎだお
さんどん杯の是をこれ知らずして頭に柳屋製の柳清香を
たらくつけ顔への花いかだと白粉を痘痕の穴お埋る程
こてく塗立て匂袋の代りに一袋十錢位の皮鹿香でこま
るし葛の葉根掛けに暗の夜の火事かと思ふ程赤く唇へ紅
をつけ手前一人色女氣取りて役者をころばさんとするが
故にへけを食ひ臂を食つて揚勺の果にの離め面をなし隅
田川さへ棹せや届く何かとゞかぬ我思ひと百々の文句
めかして愚痴をこぼし厭味をいひども是の寔に馬鹿げた
とにて到底出来ぬい相談なり思賄私しの思えぬお前思の
せうとせわしが無理とあきらめてゐるが身のため家のた
めなれば決して役者杯を思ひ慕えず馬鹿な金と茶々無茶

別々珍誌第四號
 新 年 お め だ した
 小 池 洋 二 著 作
 定 時 刊 行

に、せ、ず、五、亭、主、さん、宿、六、殿、を、大、事、に、大、切、に、お、守、り、な、さ、れ、べ
 く、且、そ、ん、な、に、有、余、つ、て、馬、鹿、な、と、に、お、使、な、さ、る、金、が、あ、る、な
 ら、弊、院、の、新、作、物、で、も、發、兌、の、都、度、と、五、購、讀、な、さ、れ、候、方、が
 宜、し、か、る、べ、く、却、つ、て、お、ん、身、の、た、め、お、家、の、お、め、に、相、成、申、す
 べ、く、と、存、候

十八

題 詩 東 京 淇 上 醒 史

好 取 自 由 托 寓 言 勳 章 今 日 視 如 禪 賞 君 曾 不
 乘 尻 馬 別 々 開 來 別 宗 門。

東京淺草元町二十番地
 聞 天 書 院 刊 行

○新著發兌院告

○役者ころばし

一冊この本をよめばどんなおたふんか
五錢女でも役者をころばしたりふんの

めすことのためやすく
できる船母とい本也

○あはたら

一冊この本は常世穿ちの新作
五錢にてかか

○人間萬事慾の世の中

一冊この本は常世穿ちの新作
五錢にてかか

願柳散人序
蓮窓釣史著

投書家諸君詩歌引証

○解語花譜

一名娼妓品評記

定價八錢

近日出版

この書著作の主意を既に團々珍聞第二百四十二号の雜錄欄内に於
て浪上醒史ある人が題詩を掲げざる如く實に天下無類の珍書なれ
ば世に風流才子通客倅人よ願く此書を購讀るて以て北里進華の
號令使と爲し南品將遊の顧問とせられんことを
○院友田口無端君等ガ牛耳ヲ把ラル、學庭志叢ハ去月廿二日ヲ以
テ發兌セラレタリ實ニ天下ノ學徒ハ發兌ノ都度々々購讀セズンハ
アル可ラザルノ好雜誌

別々珍誌第四號

明治十五年一月十三日刊行

○新年おめでたし

大狂正 蓮窓和尙記

ア、めでたいかなく、明治のお娘色氣十四の年を送りて
粵に油の立振り乗た十五年の新春を迎へ歳首連旦天清く
日朝に雨なく風た、す瑞雲皇城に懸統して祥州全市に揚
曳、日章の旗の旭に映じ緑葉の門の雲に影り人々幅漆車
馬雜踏往還ために狭く道路ために塞り餘暇ハ金線の大禮
服に勳章をびか附せて年賀に参朝し平人の羽織袴で年始
に來往し女の子は歌かるたを取り羽子をつき男の子ハ
を揚げ双六をなし年期小僧ハ二長町の乞食芝居を見番頭
手代ハ失場のお多福に現を抜しその他居酒やに這入る者
は車夫なり地獄宿にもぐり込む者は職人なり眞にこれ太

平の氣象千古同一朝野みな構結な新年を祝ひ上下齋くお
めでたき一月を賀す我輩もまた日本帝國の一民なるを以
て一箸の餅子に一抔の屠蘇をひん飲なぶら左の燕詩を賦
して以て新年を祝したりし

明治今朝四海春。民情皞々慶新年。

泰平祝酒天恩遍。仰見青帝德與仁。

然りと雖も翻つて考ふるにこの新年にあふり結構だとか
目出度とあ珍重たの恐悦たの太平だの無事だのといふは
即ち毎年の紋切形毎春お定りの口上にして恰も娼妓が客
に向つて私やおまはんには惚たんですよとか旦那歸り安く
往ませうといふ車挽の云草と一般何の悦ばしきとかあら
ん何の面黒きとかあらん然らば則ち新年めでたからざる

か曰く然りその通り違ひあしのみまん中すこしもちつとも
めでさからざる也何となれば國會未だ開設せず人民未だ
參政の權を得ざるの故に餘の滅法に威張だし鱈は失鱈に
權式ぶりて吾々を保護し取扱ふを以て吾々人民は何でも
尻々漢でも蠅々へこたれ平突張ざるを得ざればなり況や
條約改正未だ済ず收税權未だふんだくふざるに於てをや
又況や物産未だ興起せず工藝未だ隆盛なふざるが故に國
内の金融融太だわるく金貸海外に出で篋札下落し諸物價
極に騰貴しさるに於てをや左なきたに近來世道誠に悪く
風俗太だ亂れ強盜泥坊日に増し月に殖ひ巾着切附火する
野郎持込騙詐姦通投身の澤山なるを以て吾々良民は寐て
も起てもすこしもちつとも安心油斷のなふざるに於てを

や然らば則ち佞令新年なりといふも何のめでたきとか之
あらんや然るに世間の人はお目出度だの珍重だの結構だ
の恐悦だの太平だとか無事だとかよるこびくさりて酒と
飲で活惚を踊り雑煮を食て腹鼓を撞ち娼妓を買て遊び藝
者を揚て騒ぐもその金や天より降よあらず地より涌にも
あらずして各自に一年三百六十五日の間齟齬として汗水
を流し水鼻を滴しいんやら奴と稼ぎ溜る所の金あり斯
骨を折り力を盡して稼き溜る所の金を無茶苦茶に費ひ
果一茶茶々加よ棄て仕舞の恰も身で身を食が如く自分の
握り尻を嗅で辟香も及ぬ善い句ひといふと一般實に此の
如き奴等の大馬鹿の徹透大問抜の最上にして笑ふべく且
悪むべきの甚しきものなり其然り然りと雖も新年の新年

丈ありてどこやら新年の句ひありどこやら春めきたる臭
味あり況や内よ怒多場多の騒動なく外は娛多草の悶着な
きよ於てをやら然らば則ち先以て新年おめでさしといふも
敢て不可なかるべし故よ我輩を茲に本誌の筆を止め以來
國會論でわれ鮑つ貝説でわれ萬樹のへくくであま信山
家傳の千金丹であれ一竹立作たいまさであれ飽ハ一粒太
白ねりであれお氣が附れませんかであれつぱアで
われ荷くも氣に食す心に合ず我輩の疴瘠玉に障るとあ
ば遠慮なく用捨なく其論辨すべきもの論辨し其譏揚す
べきものは譏揚し其筆誅すべきもの筆誅し愈々操觚者
たるの任に負かず一以て社會の公益を計り一以て弊
院の食殿を固ふせんとす願くを檀下の看客諸君も深く此

六
意を了せよ三度の飯を一度で済せ十日に一度の女郎買も
俸の頭をはりこくつて間に合せ月々のお布施を滞りなく
奉納せられお見捨なくお見限りなくお引立御愛願下さら
んことを

○狂詩新年、生成山房先生撰

裾一等

東京 鼓腹庵 狸々生

餅搗騒止年茲改。新正家々皆自迎。一去一來門禮客。半緘半綻早梅英。
國旗影映綠松色。牛鞞音和羽子聲。射政因難還勿道。滿城綵足祝昇平。

裾一等

信陽 花月 漁夫

紙鷲羽子鞠歌喧。年始來賓口上繁。禮帽疑之官員様。歌知識得戸長門。
餅蕪酒醴家々内。竹綠松青町々軒。今年午歲皆豆幕。共敲腹鼓拜君恩。

卿台 詩烟 耕人

月落烏啼明正月。皆々節立賀春行。獨動遠摩非無故。懣懣何分難出房。

○感吟

神田 詞林 仙史

先明天下太平春。萬里同風松節新。無據世間爲附合。巡懸意宅祝詞陳。

信陽 花月 漁夫

太平風靜日九廟。雜糞三杯滿腹堅。昨夜憂忘何所去。叨傾椒酒進新年。
貧生損料裂淡新。叨祝新年訪近隣。可憐猶妓無按目。今朝春若急無心。

○歌松上霞

明目 藏人 大人判

裾一等

信陽 花月 漁夫

一文字こずえにかけの添かすみこや古法日筆拾の松

裾二等

東京 迂 流 齋

志賀の浦よる年波に見る さへ霞こめよるからさきの松

襦三等

吉原 小菊 女史

八

きのふきよ君のお出をまつばらの青よしをかく霞こめけり

襦四等

西京 御陀村 穴賢

おさまれるるるしを三保の松ヶ枝に霞の衣春の来よけり

襦五等

神田 遊惰 戯野夫

年たてば去年より年を笠松の霞ゆる目よも見ゆるゆけぼの

○秀逸

大襦位

田上 花月 漁夫

春霞こや赤繩に似たるかな嬉しき首尾の松にかゝれる

襦一等

浅草 人尹 あさ

千代とへし松もみどりに若かへり霞のうちに色まさるらん

襦二等

向島 ぶたバこ

千代経ぬる松なかりせば住吉の霞の袖とまにか、らん

静岡 三 鑑 齋

松ヶ枝にかけしもよふのつたかつら霞を妻と思ひやるらん

襦三等

浅草 春のや丹治

高妙の尾上の松に薄霞ひけるを見れば春の来にけり

○軸

判者 藏 人

佐保彦の元かく結地のうすかすみにじんで見ゆる筆捨れ松

○新年此興

神田 五軒町 納言

はら太鼓たゝいて酒を此んたくれいのぬてさすか午年の春

俎東 究 窟 山人

寶船こぎいだすよと見し夢いかに夜かざりのとみにそありける

九

今様

東京 超

古 齋

十

梅ヶ宿りに。鶯の。聲ものどかに。春霞。ひくや三筋の。音たかく。
のきばに。立てし。日の丸の。うごかぬ。御世ぞ。めでたけれ。

神田 遊惰藏野夫

遊惰藏法師の毎々御説教の通り雨根八里は馬でも越すも越すに越れぬ大晦日ぞその京況のあらましは総て世の中何事も遅々物價も厭厭押繪羽子板の勢々しきも身は板附と人ハ知らずや信主の足のせわしさは唯一足飛どかけ鳥や一人去ればまゝ一人跡方跡どくれ羽鳥あやしき門に居催促この延引の中裁と何れつバめの來る頃(雁かへる)なるへし一夜あかせば玉くしけ蓋わけ方の雜煮鍋雜煮の餅の腰つよく老の齡の固めとぞ孫玄孫のやしや子の數の子を皆

様ごまめでお日出たしと近所隣や高帽様より各位様へ官頁録の表にも勳階昇級あそばされて去年よりも肩書名増とおよろこび合の第一日と子日也へ猫豊年と萬作興り新柳二橋の橋畔の弦三の糸のつれ引や引綱な久も戀が淵何れの魚かつるならめまた若どのばらは野邊の小松のそれならで鶯の谷れ口出るこへもかなと初戀をいふ意にや北地根津等の大愉快第二此日より商人の去年の古顔それならな初荷よお目に懸る舊冬に相變らずの珠燈に赤き心ぞ見世先や去年よりも風伯れあら波立で幸にして祝融の祟りもあらぬ火加減は唯懸賀理と家内此むつみや七草はかへくしくぞ見へにけり

芳原八幡樓松尾

十一

かすみたつ今朝さぬくどおき別れまた日の出を首尾の松少枝

北里 小松屋勝山

いかにしてめぐも逢ぬ夜をまつ風のぬきによらんす君ぞこひしき

根津 大松葉松旭

君をのみ思ひまつばのふた夜三夜そらたのめにもかすみんことを

○裨賞授與式

恬勇ヲ放遊シ晩成逸經ノ院詠ヲ踐ミタル間天院大狂正平
下ハ鼓腹鹿狸々生及ヒ花月漁史ヲ以テ迷地裨賞ノ裨一等
ニ叙シ文人菓物一個宛ヲ授與ス仍テ其許等ハ此品ヲ難有
取領セラルベキノ毒權ヲ有ス

越原二錢五百四十二餘一月九日淺草院内ニ於テ蓮窓自
ラ名ヲ書シ焼餅判ヲ捺ス

五判

蓮窓方直

色男歌女代陣 詞林仙史(印)

兼賞裨局相妻 自惚妓漢兼 詩畑耕人(印)

皆品ヲ検査シ第一號帳簿ニ記入ス

女殺大性氣漢 兼一等秘娼漢 烟峯極老(印)

狂氣生 三鑑齋(印)

二等秘娼漢 遊惰戲野史(印)

廣告

万亭應寶著

○明治十五年末來記 全一冊

○宮院省使廳使府縣職制一覽概表 全一冊
 紙入 定價金六錢

○發兌元梅草小島町十番地 村上奉一

○東洋立志篇 初編二編 既刻 定價一冊三十五錢宛

○先哲叢談 全一冊 定價五十錢

○泰雄辨大家集 全二冊

○山居物語小西甚之助序全一冊 定價

○傳媚艶評 一名東京美人かゞみ 全一冊 定價廿九錢

○頭上鴻碩金語玉言鈔 全一冊 定價廿五錢

○泰西史鑑

出版書林 神田維子町巖々堂

大方ノ諸先生ヨリ新年ノ賀詞ヲ
 辱フシ難有奉存候就テハ早速拙
 生ヨリモ御答賀可申上之處拙生
 近來國事ニ奔走シ寸閑ヲ得ズ依
 テ乍略儀誌上ニテ御年詞申上候

小池洋二郎

本誌新規大賣捌所

三州播豆郡西尾中町	川島富次郎
相州小田原緑町一丁目	石壽堂
盛岡本町通	澤田正助
信州長野	小升屋喜太郎
同上田原町	境屋武右門
尾州名古屋玉屋町一丁目	金子藤治郎
甲府柳町三丁目	徹古堂
下総境町	高木直次郎
尾州知多郡半田村	小栗太郎兵衛
加州大聖寺町	醒世舎

謹賀新年

小倉拙友 詩州耕人 詞林仙史
 田口無端 三鑑齋 州峯極老
 三府三十七縣辱交ノ投書諸君へ

院告

一狂詩題 狐花月漁夫大人撰
 二狂歌題 狸明日藏人大人判
 右來る二月十日まで御投寄下さ
 れ度奉願候

近頃本誌愛着の諸君及び賣捌所
 の中に見倒し賣倒し半額文も
 お拂ひ下されざる方ハ無用捨そ
 の趣誌上へ廣告仕るべく候間此
 段前以て申上置候也

上州藤岡 松の屋定吉
 越後魚沼郡水澤村 富井喜兵衛治
 常州下妻町 文正堂

本誌一冊・定價九錢 十冊前金四十五錢
 廿冊前金八十五錢 遠國遞送ハ此外
 ニ一錢ノ郵税申受候
 弊院珍誌ノ儀ハ前金ナラデハ何
 方撥へ遞送不仕候間五注文ノ節
 ハ何冊分ニテモ前金ニテ御遣シ
 下サレ度奉願候

明治十四年十一月廿五日出版御相濟
 著作者 小池洋二郎

出版人 東京淺草南元町
 廿番地士族 岩崎龜吉
 神田七町三十
 二番地平民

發兌書林 東京神田維子町
 巖々堂

別解 女珍 誌 第五 號
 譜 花 語
 記 評 品 妓 娼 名 一

小池洋二 著
 定時刊行

○題詩

東京 詞林仙史

於柳雖窈，奈無華。於梅雖粹，又知啞。有香
 有色，有情者。夫此人間解語花。

牛込 無端情史

發刊娼妓品評編記者，高名玩柳仙花廓，
 真情書得善治郎開卷，忽流涎。

靜岡 醉仙魯吻

吉原根津泥中，運古往今來。○○寬永，
 名花評已舊，明治芳譜入新篇。

發兌本局

東京淺草區
 南元町廿番地

聞天書院

○題詩

本郷 詩畑 耕人

先生今度評娼妓揮筆旨編世上弘可祝如生金吉者乍居醜美悉知舛

九段 三好 仙史

別品甚喜自分傳才子亦愛妙術編先生狡猾真堪驚喜衆人裡貪多錢

○ 午込 鼓 腹 庵

先生能探妓流蘇前品猶連此度孤得意狂文具面白美人評判不書無

小池蓮窓君有解語花譜著徵題詞于余歲晚塵事紛忙無些暇隙

因寫舊作之一詩塞責

靜陵 醉猫 道人

花柳事情發東州將爲北里春史頃每條各目揮快筆內外穿來備治遊

解讀花語叙詞

知るも知らぬもゆきちがふ袖摺稻荷草深くと土佐曲の淨
 瑠璃よ謠ひ初めたるは元祿以前の開けぬ昔し明暦三年睦
 月の大火に元の蘆原類焼あし今の地に移りしより明治十
 四の今年迄星霜全く二百二十五年其間へに添ふ星うつり
 物日の物もかわりゆきて親方の祝ひ四日ゆすりは榨木
 にかけらると思ひもあら玉の春を幾く年か縛ばられて永
 き年期の勤めの身も大門口の高札と共に今は廢されて千
 金の公子に厭ながらも身を任せたる高尾の成れ果ても自
 山の枝に宿りを定むる自主の離れ鳥となり枕の響きに地
 震なず二階作りの板屋根萱は三層樓の煉瓦と變し飯櫃の
 底の淺き縁にしも佳妓の實情は臺の物の玉子よりあつく

晦日の闇も文明の月曜日には檢洞ありて光源氏も業平も
 鼻に嵐の憂ひなく廊中の賑ひいふべくもあらざれば門に
 掲ぐる振書のお見立違なからんとを余が友とちなる
 小池主が佳妓の名を残りなく綴りて傍ら面貌多情に無情
 枕席の塵不塵まで品評し風流才子の一覽に供へんとする
 趣工を聞き余もまた自慢の鼻高天狗知つて叙詞せざらん
 と男兒の恥と些をかり吉原の事情をば明かにするまゝ無
 益の言を並べたて家のやみ夜に綾かき筆をばしゝする者
 は昔の吉原の廊育ち今ハ三筋坊に近き三味線堀の片ほと
 りに始終浮かれて暮す願柳散人

○解語花譜題詞

洪上 醒史

前樓歌和後樓絃、一步入廊人欲伸解語、花百種、家々紅燈萬點懸、樓上

治客皆浮込、美酒佳肴張芳筵、目的別在深閨裏、使人魂飛有頂天、六曲屏繞
 情話靜恍惚、流來三尺涎、唇接唇時臂擁臂、死生決處骨如綿、何時被郎根引
 得永爲夫婦、夜々眠不妨、提鍋賤伏屋、不厭曬布細谷川、妾身元許有實客、妾
 身不願富萬錢、簌々聲裡殘燈暗、温々衾中鴛鴦圓、魂消肉飛夢不識、恨殺枕
 頭曉鐘傳、御近中語猶在耳、回顧柳下別恨牽、一夜難忘到二夜、怠馬心猿狂
 欲顛、此時此情誰能覺、微樂穴臨困苦淵、同樂親友遊窓子、頃記女郎作新編、
 題之曰解語花譜、情事委敷探日穿、根津吉原及南品、坐看樓々幾輝妍、方知
 遊兄多金儲、治郎爭購百具、千買花譜好買花、止醉史書譜不轉先、女郎之實
 天下沒、甘言自信自惚惚、必竟被振勝、被惚惚、應悟長絲是恩絲、鉄漿溝中流身
 代、泥水流邊汚名前、古今幾萬少年子、居盡家財消爲烟、至此怨彼遂無益、他
 取手管以自賢、後悔悔、臍何處訴、也似計算死子年、夕霧瀨川墜己、古今日豈
 有泥中蓮々子、深意人知否、聊是欲認助平、蓮君不聞古人意見、曾有道吉原
 爲明家暗焉

も、とせも。花に狂ひて。すくしてき。此世之蝶の夢と詠けん
 へ。蝶を愛つる花なれや。花が呼つる蝶なるを。互ひの中も。あ
 かねさす。色さめぬまの。夢なれば。あわれも、とせも。干とせ
 もかけて。見て。一がか。夫花を衆芳を競ひ。群美を華むと。か。謂
 ふなる。心の種の。誠より。言葉の花の。八重咲や。淡き色香も日
 敷。経て。濃き色染る色界を。花柳の街どこそ。いふつけ鳥。日
 も。吳竹の伏見町。ぬしのお出を。京町に。門に立たる。客人の。靴
 引とめて。揚屋町。ゆかり染あす江戸町や。すまぬ心も。角町と。
 いつか二人が。仲の町引多数多の大幣も。つひによるべのあ
 りといふ夜の櫻の普賢象。小町揚貴妃照君の笑も。婀娜なる。
 花姿。あふ夜の床のあやなし。むば玉わかぬ。闇の夜を。さこ

その月の肩つくり。雲の装衣のうちかけや。雨よしほる、海
 棠の眠れる姿かど、いふい、ぶんも唯梨子の花あり家を
 ぱ。たとへ千里をへだつとも。匂ひやるせの梅か香や。花の兄
 なることつてを。菊まぢかねる花の妹。姉妹の也かり。淺から
 ぬ。嬌を離ひて。桃とせの。幸福を誰まか。まか玉の。神かけ。願ひ
 り。桃園よ。ゆらぬ。藤の軒くらへた。そかれまか。ふ夕良を何
 れあやめ。杜若。弓矢。とるなるます。雄も。いか。と引ぞ。煩ひ
 けん。戀てふもの。初風に。なびく尾花の。穂の文字を。秋の初
 花咲やして。小鹿の胸は分るとも。いと。酔かる。思ひを。バ。我
 身よ。かはかり。いとふまで。その。恐び音を。糸竹の。調にかよふ。
 酌女の。荷葉草の。功。験あや。胸を開くる。花王草花の下にて。日
 を。經てし。二十日ばかりの。流連を。まだ。き立。ある。立樹の。其あ

六
かつきに百合起されて。鼓うち。浦英公ボンと。狸寝やせん。朝顔の袖をしほりて。二葉草。またの葉を契りてし。八千代とかけて玉椿玉。名のある遊城も傾けるといふなるいましめ草もあるとかや。今回文壇に其名も響しく。當時うり出しの一才子。蓮窓情史がものせられし。解語花譜に。一言せよといふがまに。早麻の。りつめたる禿筆。何を岩間の姫躑躅ケツトを陳敷たる。練言は。山茶さなる。重言片語。たゝおかしくやでゆるしたべ。

明治十五とせ。一月四日神田萬世橋南の春夢樓上に
おいて遊惰戯野夫しるす

解語花譜一名娼妓品評記

蓮窓 夕霧丹治 戯著

解語とは何ぞものいふなり花譜と何ぞ解語花の何を譜せしなりものいふ花の何を譜して何をか爲す曰く風流才子の不聊を慰め遊治蕩客の鹽誠に供ふ耳夫れかの快々として樂まざる所以のものは世名花の乏しきに因にあらずして其花の咲園を知らざるによる又かの遊治蕩客が身を過り家を亡して世上の笑柄となる所以のものと豪遊を極はめたるに因にあらずして其花の性致如何を知らざるによるあり予が今貴重の光陰を費し多少の楮貨を投じて此書を著しを世に公にするは其花の咲

園を知らしめ其花の性致如何を知らしめんがためのみならず別に大に思ふ所あるによる然と予や生れて茲に廿有一天稟の不粹なるいまだ園裡に入て花を弄びしとなく枝を折しとなし安んぞ其真致を寫すを得べけんや況んや魯鈍の才滋禿の筆に成る所の此書をや看官諸君の笑唾を蒙るい固より予の期する所也

濃紫芳原角芳原三千の娼妓中に高尾揚巻の才力を存し薄雲

八千代の氣量有し真に往古此花魁太夫に恥ざる者は獨り此妓あるのみ濃紫齡三七品格よろしく容貌艶濃嫵媚さる風姿ハ羈玉を惱し窈窕たる態度ハ皇帝を迷さんとするが如きものあり是を以てさきに稻本樓にありて福壽とよびし頭より聲價太だ高かりき後故ありて今に

角海老樓に移るとれより聲價一層たかく顯官に紳士に
行て之と買ざるはなく豪商に學士に争ふて之を揚ざる
はなく爲に衾裡冷を告るの間なし其全盛また思ふべき
なり友人三柳舍醉仙詩あり以て証と爲す

立姿荷藥坐牡丹尋常一様、非別嬪樓主、殘酷笑脱籍、
小紫抵抗嚴無論豪遊常、擬紀文片、意趣恰似地獄偷

墨染全大其貂ハ桃花其眉ハ春月柳腰細々纖手媚々秋波一
注人を惱す之をか久米仙其人よ見せしめなば果して
いかかる感覺を起すべきか小倉机友詩ありいふ

揚柳芙蓉何復及桃花窈窕價千金泥中看得顔如玉、
芳原廓中香氣深

湖蝶全組此妓の志氣豪放して資性傲捷かり苦海に身を沈めてより茲に三年閨事頗る老練にして送迎のと太だ巧みなり是を以て全盛茶妓の右に出で聲價大に高しといふ

左京根津大顔玉の如く委柳の如く眞にこれ近來多く見ざる
八幡樓
一大尤物なり年紀二九品格またよろし超古齊詩あり

石部金吉垂涎程其美其妍非諱誠評判根津第一等

全盛今日冠東京

金糸芳原この妓の居常風流を好みまゝ讀書を善くす容貌之雨に惱める海棠の如く風を厭ふ芙蓉に似たり

宮城野全尾張樓安容姿うつくしく品格もよく誠よ云分なし
梅ヶ枝全尾張樓新年紀二八眼元すゞしく煙姿にして近頃賣出し

の尤物なり氣質優く親孝行の聞いあり

君葉根津君葉は容姿より丹鼎の善きを以て人よ知らる而して此妓の花園に居ると數年なるが故に送迎の技園中

の秘術亦甚だ巧妙ありといひり

靜江よし原此妓天性淑便容致最も麗し姉を初紫といひ現に今稻本樓にあり始め姉妹ともに金瓶樓にありし頃ハ

此妓の聲價大に高かりしが不幸にして該樓の主人滄桑の變に遇ひ業を廢るにいたりて今の大字樓に移りしが聲價前に反し頗る落さるが如きものわり知らず何等の原因なるか友人香渚仙史詩あり曰く

蔷薇爲妹牡丹姉數柔粧成半砌風蝶詩香如有意來

綠花蕊吸嬌紅

染の助本樓姿致輝妍にして大度温和全盛無双の松位也

榮山全小松樓この妓之年紀二九態度婀娜にして嬌媚滿面に溢

れ人をして覺へず恍然たふしむ是を以て掲籍以降未だ

六旬ならざるも大に全盛を極め一夜の迎客ハ少くも七

八人に下らずといふチイ何とおいらん此様に澤山お客

が垢つてと佳快ともあるでせうけれども又お骨も折る

でせうチイ誠に實に五苦勞様通にお察し申します

小町全中米樓此妓容姿ハ醜美此中にあれども天性利發にして

萬事抜目なく取廻し且聞中の情味太だ濃かなる所ろあ

り故よ人多くは此妓に胸を鎔され鼻毛を敷る、云

初紫全寶來樓初紫は舉止妍媚にして當時中店屈指の花魁あり

年二九良家の娘子の如き所あれども其人情を解し世故

に通ずるに至りては實に吃驚仰天山崎街道の與一兵衛

をやらかさざる得ざるものあり淇上醒史詩あり曰く

芳嫩既先跨妓叢向人轉憫說衷情柳腰細瘦柔如此應

不禁朝雨暮風

粧全住吉樓誰は桃花の而細柳の腰あけれども性質伶俐遊客を

自在に籠絡して八陣長圍の中に陥るゝと最も巧みなり

故に之が客たる者も彼と機智相抗するにあらずんば魂

魄を奪れ鼻毛を敷れ遂に兎を脱て降参せざるを得ざる

に至るべし何と看客合點でえないう氣が附れましたか

錦根津大八幡樓此妓氣質淡泊にして且豪淫なるが故に聞中飽くを

知らず雲雨の情尙彼れより客に求めるものあるが如し是

を以て多情蕩客と各意中人を自許て争ひ來り晝夜衾裡

盛

系芳原福
大黒樓

この妓年二九顔ハ海棠比雨に惜み姿ハ揚柳の風

を厭ふ如き態度にて北里廊中軒別に尋ぬるも之と比

ぶるに足るべきの妓あるを見ず實に絶世の佳人あり然

りと雖も惜い哉今日小店に居るを以て未だ聲價を揚る

を得ざるを若夫れ此妓をして稻本尾彦等の如き大籠に

あらしめなば濃紫染之助等の花魁と拮抗して全盛その

右に出るや知るべきなま花月漁夫詩あり証を爲す

きちかうの其紫にくらぶれば余の柳花の色あかりけり

松尾全八幡樓 風致佳美にして品格甚だよろしく加るま性質か

しこく客人を鹿略ませず誠よ年若の娼婦にハ珍らしき

尤物あり机友處士句ありと云ふ

つやも香もなに不足あき櫻りあ

小福品川

年紀三八にして容貌うつくしく太だ風致あり是

を以て全盛神浦の廊内に冠たり小福も亦自ら之を許し

てか少しく客を輕蔑するが如きものありといふ

小菊芳原

意氣容姿欺太真、輕妝婀娜似天神問而不答抱不笑

爲殺春園夢裡人とは友人三好子が嘗て此妓の眞影に題

せし所の詩よして以て其尤物なるを知るべきなり且こ

の妓性質洒落にして頗る酒を嗜み鯨飲毫も辭せず而し

て酔ひハ則ち狗子外の謠をうたぬ頭珍漢の踊りを爲し

大よ一坐の興を湧す殊に閨中の手術の如きに至りてハ

其巧みなるを實に名狀し得べかざるものあり

羽衣全河内樓 此妓ハ櫻花の風を厭い海棠の雨に惱めるが如き

羽衣全河内樓

此妓ハ櫻花の風を厭い海棠の雨に惱めるが如き

歌
 風致ありて加るに天性利發なりといふ
 川芳原眉欺揚柳月裙妬石榴花どハ即ち此妓の謂歟歌川
 容貌大に美麗にして甚だ風致あり若夫れ此妓をして大
 店にあらしめなば濃紫歌之助の右に出るども其下には
 出でざるべし蓋是著者一己の惚た横目にわらずして湯
 子社會の輿論なり而も其氣質の如きに至つてハ優淑敏
 捷にして毫も良家の生娘と異ならず吁此妓をしてこの
 賤海に入しめずんば則ち鯨鱈の權的となつて日曜同車
 の榮譽を極めんか否らずんば則ち紳士豪商の妻君とな
 つて何不自由なき榮譽を極むべきに悲い哉天此人に幸
 福を與へず賤海に入しめて其身を苦しましむ何ぞ亦天
 の不粹にして無情なる一に此に至るや予甚だ此妓の爲

に惜まざるを得ざる也超古齊詩あり曰ふ

朝迎入的夕熊公。日夜去來人不同。薄命誰知丹鼎苦。堪
 隣浮川竹之躬

小式部全住吉樓此妓ハ年二九離鸞將に語んとして尙ほ略嗟し

梅花已に綻んとして未だ春風を得ざるが如き態度あり
 而して其客に接するや美男醜郎の差別なく甚だ深切を
 極むと云また此妓曾て親孝行の聞へありと雖も予未だ
 其果して然るや否を知らず予因てそのうちに三軍を率
 ひ進撃して以て旗鼓の間に見へ詳いとを看官諸君へ報
 道する所あらん堂ぞ狸寐入をうて待てゐて頂戴
 七越根津凡そ娼妓は顔美かりと雖も心悪なれば取に足ら
 ず容醜きも心善なれば尙ほ取に足るべきなり抑も七越

容姿折るべきの風致なしと雖も其心操の端正なるに
 至つては泥水海中多く之比ぶべき者あるを見ず予が
 友八霞陽處士嘗て此妓の噪名を聞き一夕行て此妓を揚
 げ宴罷んで園裡に入る七越徐ろに處士を誡めて曰く夫
 れ花街の人間の本心を銘す所にして人を騙す妖怪の
 飛廉なり是を以て書生諸君の志望と妨ぐる此所より甚
 だしきはち一妾熟ら郎君の累止を見るに年まだ若きも
 學識既に同つながら備わて他日大に爲有の男兒なり然
 るまもし一時心の狂ひより狹斜の地に入て遊治をなさ
 ば遂に身を過つて世の笑柄となるや火を見るよりも明
 けし妾今斯く云ば甚だ郎君を厭ふに似たれども決して
 然るにあらずして只郎君の前途を憂ふる所われなり

願くは郎君よ耐后志望を遂るまで再び花街よ入る勿
 れど處士甚だ其言の理あるに服し去て亦至々すと云之
 を夫仕途に汲々として朝に靴門に出入し夕よ勢家に傳
 聞して以てお籠の塵を掃ひ以て謾言をふんづかつて六
 圓の月給にも旨じてありつかんとを惟願ふ所の恥を知
 らざる奴等よ比すれを其差果して如何ぞや管に提灯と
 釣鐘のみにあらざるなり吓誰か世澆季せりと云ものぞ
 亦誰か人輕薄ありと云ものぞ泥水海中に身を沈めて春
 を鬻ぎ情を賣るを業とする娼妓のうちにも七越の如き
 者あり今の仕途者流よ汝等此妓を見て心私かよ恥る所
 なきか汝等は苟くも男子なり七越は一の婦人なり男子
 まして婦人に劣り婦人にして男子よ優る是豈に汝等人

に笑れざらんことを欲するも得べけんや其笑れざらん
とを欲さば宜く速に自立の計を爲すべきなり何ぞ他人
の力を仰ぐを惟要せんや咄汝等此妓を見て心私かに恥
る所なきか

若太夫芳原榎 齡三七 瘦姿にして顔麗しく愛敬あり之を以て
全盛を極め比樓の阿職の位置を占るに至れり花柳庵三
鑑主人詩あり以て証と爲す

吉原妓流第一 腰遊夫一見魂欲銷可知 毎夜聘客夥閃

利鎗爲越腹橋

福壽全 稻本樓 貌は玉を欺き姿は柳の如く才能ハ以て高尾揚巻
を壓し藝を以て吉野八千代と抗す眞にこれ近來珍しき
一尤物にあらずや然りと雖も此妓花街にゐると數年な

るが故に客人を籠絡するの手術もまた頗る巧み也

九重全大文

此妓は大文字樓の一尤物にして妙齡二八態度頗

る佳く背燈の一探亦以て情痴者流を惱殺するに足る予
一夕洪上醒史に拉まてこの樓に登る時方に懸燈紅を上
せ満街潮を湧し遊客沓至一妓當千の晩にして時の甚だ
得たるものにあらざりしと雖も亦これ一夢千金の良夜
たり宴罷で各閣裡に入る時に隣房の情話喃々として予
をして敵媚の回來遅きを覺へしむ此よ於てか予起て之
を偷聞するに即ち醒史が九重と手術を談ずるなり醒史
いふ卿や年少洞門頗る狹窄余の大的それよく受るに堪
るか九重いふ妾寧ろ快なりと忽焉轉鳳狂鷺六曲屏裡に
現れ來る予史に謂て曰く牝猫屋よ呼が如きハこれ何ぞ

やど時よ史九重と共（ま）に早く巳（ま）に恍然（わが）答（こた）ふる所（ところ）を知らざりき（し）嘒（くわ）鴉（あ）聲（こゑ）を散（ま）ト東方（とうほう）傾（か）よ明（あ）し史（し）起（お）き予（よ）が房（ふ）よ來（き）りていふ（い）那（な）妓（ぎ）の多情（た）なる一局（いち）未（ま）だ了（ら）らざるに早く又一局（また）を繼（つ）ぎ來（き）り至（いた）も其嫌避（きら）の態（ま）を見（み）ず若（も）夫（う）れ健鋒（けん）強鎗（かう）ある君（きみ）の如（ごと）き人（ひと）を以（も）てせば徹夜（てつや）尙（な）ほ足（た）れりとせちらんも測（は）る可（べ）らざらんとすと巳（ま）よして楹上（けいじやう）の鳴漏（なり）八時（はちじ）を報（し）す寓（やく）に歸（か）りて後（の）ち詞林（し）仙史（せんし）に話（わ）す仙史（せんし）只（ただ）笑（わら）つて答（こた）へず一詩（いちし）を書（か）して以（も）て予（よ）に示（し）す予（よ）把（た）て之（これ）を見（み）るや始（は）めて史（し）が九重（くわじゆう）と疾（やく）に綯（な）纏（ま）なるを知（し）れり其詩（そのし）に曰（い）く

譽（う）言（ご）兩後海棠（りうごたいかう）容（よう）只（ただ）房中春意濃流石東京品物丈遊
人（ひと）一見戀情重（いちけんこいじゆうじゆう）

金龍（きんりゆう）品川樓（しんがわら）起（た）てば荷藥坐れば牡丹あるく姿（すがた）の百合の花（は）と

即（すな）ち此妓（このぎ）をいふか金龍年二九顔美にして姿媚（すがた）かに居常（い）風流（ふうりゆう）を愛（あい）し俳諧（はいかい）を善（と）く玄氣質（げんきしつ）淡泊（たつぱく）として随分人柄（ずいぶんひとがら）なり

玉靜（たまじやう）品川樓（しんがわら）此妓（このぎ）の性質（しやうじやう）伶俐（れい）にして客人の心腸（こころ）を看破（かんぱ）し得（え）るに妙（た）を極（た）めり年三七而姿と醜美（みに）の中（な）

在原（わら）全角海（ぜんかくうみ）老樓（らうろう）芳原三千の娼妓（わら）中に才貌（さいぼう）両全（りやうぜん）を以（も）て名噪（な）しきものは獨（ひとり）り在原（わら）あるのみ故（ゆ）に自己（じ）も亦（また）之（これ）を許（ゆる）してか常に權式（けんしき）振りて客を待（まち）ふといふ

和國（わこく）全大文（ぜんたいぶん）松本万年翁著す所の新橋雜記（しんがし）曰（い）く凡（た）そ妓（ぎ）の三九（さんく）以上（いじやう）の若妓（わが）よあられは眞（ま）の佳快（か）を爲（な）し難（た）しと善（よ）い哉（や）此言遊治の秘法（ひ）云得（い）て妙（た）なり夫（か）の若妓（わが）等（ら）が後朝（ご）の別（わか）れに際（ま）し又何（い）日（ひ）來（き）るんですといひなむら仮（かり）呼（よ）を（し）或（ある）は相進（あ）の夕（ゆ）べに當（あ）りおまはんの顔（か）が見（み）たくて（て）戀（こ）れ

切て居一たに今晚はよく來ておくんな一たの巧婦
 を粧ふと雖も末だ世故も通せず人情を解せざるを以て
 互に心情を話し難く從て房事も嫌避せんとするの状な
 きよあらず然らば則ち毫も佳興とはあらざるなり是蓋
 し若妓の若妓に及ばざるゆゑなり和國齡三九容貌大
 に美にして眼は秋水を凝し眉は春山を畫きたるが如き
 致あり而して其容を待ふや甚だ厚く且客の不聊を察す
 れば則ち心情を話し世故を談じて以て之を慰め而も閑
 門の如きの頗る老練にして深抑高揚自由自在を極め大
 におもしろみあるを以て一度此妓のもとに至れば必ら
 ず再遊をかへさざるを得ざるといふ
 紫川樓類に少しく痘痕あり然ど敢て人目にたつといふ程

にとあらず俗に所謂愛嬌痘痕といふこれなり而して其
 風姿の綽約なるに至りては遠く濃紫などの及ぶ所にあ
 らず然りと雖も資性少しく氣隨あるが故に往々客に賦
 せらるゝといふ東雲屋三好詩あり曰く

思男自負被卑擯野夫多情厭共春好是輒嘲浮世習不
 知深意在誰人

左近根津大此妓の才力大にありて頗る意氣地つよく眞に媚
 婦らしき所あり年二九態度また佳麗なり

歌の助芳原大嬌容宛然蓮花を欺き蛇紫嬌紅彩霞の如く質に
 これ芳原無双の松位なり而して此妓また頗る才智に富
 むが故に蕩客を手管にかけるとも甚だ巧みありといふ
 友人花月漁夫歌あり以て証と爲す

皆人よ心して折ればらの花枝にの針のありと聞けば
店土全 尾彦樓 類麗しく眼鏡く品格のよき一大尤物なり

廣告

服部應賀先生著

○明治十五年未來記 全一冊書入

○官院省使廳府縣職制一覽概表 全

帙入 定價六錢 遠國郵税二錢

發兌 淺草小嶋町七十九番地 村上奉一

小池洋二著述

○人間萬事慾の世の中

○あほだら經

○役者ころばし

○新年おめでたし

右定價何れも五錢遠國遞送ハ此

外に一錢の郵税を願外

○天下の人ハ皆大馬鹿 五錢

この本ハどんあこどが書てある

る近日賣出しますから其節之皆

三ぜひ一冊づ、買て五覽くださ

いまし

○おきが附れませんか 五錢

この書は今日世の中の有様をね
こそげさらい上げ馬鹿な奴ハ立
派な方でも何でも馬鹿といひ利
口おもものハ八公でも熊公でも利
口とほめ誰憚ることあく何も恐
れる所あく勝手放題にひつかさ
さるまことにおもしろき本かり
近日出版になりますから皆三ぜ
つび買て五覽を願いますよ

明治十四年十一月廿五日出版御相濟

著作者

小池洋二郎

東京淺草南元町

廿番地士族

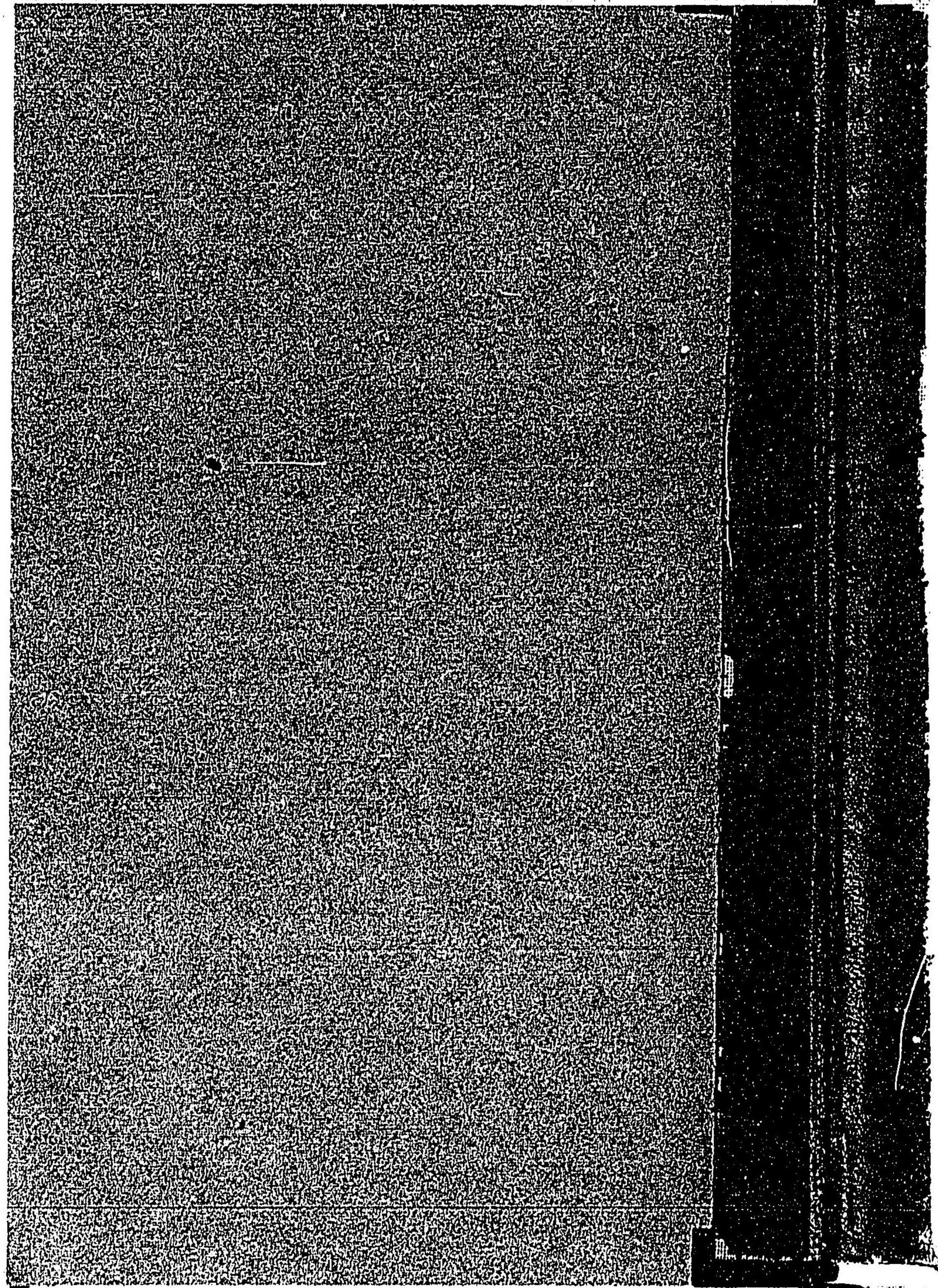
岩崎龜吉

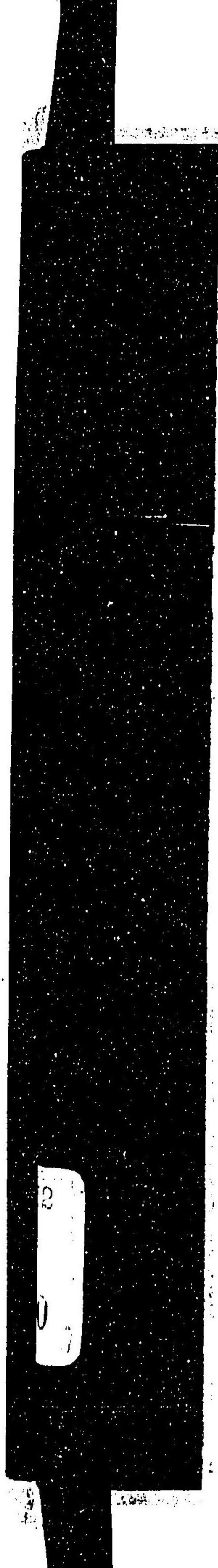
神田きじ町三十

二番地士族

出版人

7.5





2
0

別々珍誌

第1-5号

聞天書院

国立国会図書館

091868-000-0

特52-510

別々珍誌 第1-5号

小池 洋二郎/編

M14-15

DBO-0400



5

[Faint, illegible text on the left page of an open book]

